螺子（ねじ）

一二三　哲也

ちゃんと回れば　きっちり締まる
逆に回ると　すっぽり抜ける
あなたのネジも　回しましょう
回す向きを　違えぬように

時計

一二三　哲也

カチリ、カチリと
音が続く
メトロノームは
僕らの心臓
明日へと向かって
カチリ、カチリ
僕らも一緒に
カチリ、カチリ

寝起きｏｐ　　鬼無里　悠夜

「――様、お兄様！！　起きてください。お兄様！！」
「……う～ん。あと３６００秒」
「秒数にすれば短く感じるかもしれませんが一時間も寝ないでください！！」
「お兄様、朝です。起きてください！！」
「じ、じゃあラジオ体操――」
「六時半でございますか？　もう、過ぎましたよ。お兄様」
「――の進行役の人が女の人になるまで」
「マニアックすぎます！！」
「それに女性の方が務められるのは土日でございましょう。今日は月曜日ですよ！！」
「朝からお兄様、お兄様と五月蠅いなぁ……。一体君は何様のつもりなんだよ」
「あなたの妹ですよお兄様！！」
「わかったよ妹！！　まったくうるさいなぁ。大体俺は姉キャラの方が萌えるんだよ。今すぐ成長して俺の年齢または身長を追い抜いて来い。妹」
「……そんなことを言われましても。私には時間を早く進めることも成長を早くすることもできません。それに何故私のことを名前で呼んでくださらないのですか？」
「それはこの話が短編だからだよ。妹。名前を紹介しているほど暇はないんだ」
「……メタ発言でございますね。お兄様」
「ちなみにあと四十行もせずにこの話は終わる」
「そうなのですか！？　お兄様との楽しいひと時がそんなにも短いなんて！！」
「短編だからな。――ところで妹よ。今から妹に大切なことを教えよう」
「大切なこと、でございますか？」
「ああ、ぶっちゃけ妹の存在よりも大切なことだ」
「それは酷すぎます！！」
「俺にとっては妹よりも幽霊の方が大切だしな」
「……それは暗に私に死ねと言っているのでしょうか？」
「それよりも。まず一つ目だが、妹よ」
「流さないでください！！」
「〃この世界には楽しいことなんて一つもない〃」
「はあ、最初から厳しいお言葉ですね。しかし、お兄様。私には楽しいこともあると思われますよ。今だってこうしてお兄様

と話していることは楽しいですよ？」
「だろうな。だけどな、それは妹が勝手に楽しんでいるだけにすぎん」
「勝手に、ですか……。」
「〝この世界には楽しいことなんて一つもない〟だがしかし楽しくないことを楽しむのは他人の勝手だ」
「意味深長なセリフでございますね」
「ここらへんで難しいことを言っておかないと只のコメディになってしまうからな」
「そんな思惑があったのでございますか！？」
「そして二つ目だが……」
「またしても流しましたね。……何でございましょうか？」
「――人の部屋に勝手に入ってくんな！！」

布団

ああ眠い
ああ眠い
よっこらせっと
勉強するか

一二三　哲也

ふたりぼっち

片桐　修

『お前と一緒にいられるのなんて、俺くらいだからな』

体育館のステージになった少年が、その下で見上げるもう一人の少年に言う。

『俺が一番信頼できるのも、お前だからな』

下にいる少年も、上の少年へ言い返す。二人の顔はぼやけていて、よくわからない。

上にいる少年が、大仰な手振りで語るのがわかる。

『俺がいくつになっても、どこに行っても、俺と○○は、・・・だ！』

～～～

い』って新手の断り方だな！」

　このように、大学に入ってから二年近く、俺は安木に付きまとわれ続けた……だが。

「……ああ、安木？　実家からスイカとどいたんだけど……食べきれないから来い。食わしてやる」

　一緒にいて、安心できる相手だった。

　2018年冬。成人式に出るため、俺は故郷らしき町へ来ていた。記憶を失ったとはいえ生まれ故郷。今までの治療では一切効果がなかったが、何か思い出せるものがあるかもと、担当医師が俺をその町へ行くように指示したのだ。

　私鉄で2時間。生まれ故郷は栃木の中央部の小さな町だ。駅から折りたたみ自転車で20分ほどで、会場に着く。が、そのあたりで妙な感覚に襲われる

『〇〇遅い！』

『お前が早すぎるんだっての！』

　その感覚は、衝動に任せペダルをこぎ続け、成人式会場を通り越して、バイパスを通り抜け、出身らしい中学校の体育館に至ったところで確信になる。

「やっと来たか。遅いんだよ」

　俺と同じく、スーツに身を包んだ安木が、ステージの下から俺を見つけて破顔する。俺は短く、悪い。とだけ答え、ステージの上に立つ。

　そして、曖昧だったあの日の約束を、何度も見た夢を踏まえ、新たな約束にする。

「俺の親友はいつになってもどこにいても、記憶を失っても。お前だ。ヤス」

　3年かけて、全てが思い出された。おれの親友は、たったひとり、ここにいる安木章だ。

「俺の親友も、お前ひとりだ。スバル」

　高2まで同じ高校に通っていたヤスは俺の転校後、人づてに転校先、また俺の志望大学、学部を調査、必死で勉強しそこに合格したらしい。

　すべては、俺とまた……

「俺とヤス」

「俺とスバル」

　中学の卒業式前日の、あの日の言葉を、繰り返す。

『ふたりぼっちだ。』

　自転車で、慣れた田舎道を二人でひた走る。

「そういえばヤス。性格は良いんだし友達とか普通にできるんじゃあ……」

「あー。軽すぎるって言われて誰も深い仲にはなってくれなくて……女性関係も疎かったから高校最後のほうなんてホモ疑惑が……あれ？なんで距離とるの、スバル、スバル？？」

とりあえず、ヤスに彼女を作ってやろう。

弱い心

一二三　哲也

隣に、とても美しい女性がいた
僕は正直に、その人に美しいと伝えたかった
変だろう？

僕は、彼女と親しくなりたかった
こっそりと、紙に自分の宛先を書いて
「あなたの宛先を教えて下さい」と書いた
でも、書いただけで渡せなかった
意気地なしだと思うだろう？

彼女は、事を終えたようで
荷物を片付け、立ち去ってしまった
僕は、何も出来なかった
つまらないと思うだろう？
こんな事でと思うだろう？
僕を、弱いと思うだろう？

こんなか細い、僕の心を

そば

梅花　希紀

風がそよぐ
桜が散る
ぼくのそばに
あなたはいない

風がそよぐ
風鈴が鳴る
ぼくのそばに
あなたはいない

風がそよぐ
ススキが揺れる
ぼくのそばに
あなたはいない

風がそよぐ
落ち葉が舞う
ぼくのそばに
あなたはいない

嬉しい時も
楽しい時も
悲しい時も
苦しい時も

いつも　そばにいてくれた
いつも　近くにいてくれた
いつも　一緒にいてくれた
いつも　笑っていてくれた

どれだけ経っても
どれだけ待っても
ぼくのそばに
あなたはいない

なくしたものは
あまりに大きく
ぼくはそばを
見られずにいる

人間最大の罪っていうのは何なんだろうか、なんてガラにもないことが頭をよぎる。それもクソ坊主のつまらない読経のお蔭だろうね。

「つまんねぇなぁ――」

不謹慎なのは分かってるんだけども、事実ってやつは空気なんて読んではくれない。俺がこうして必死に退屈を我慢してるっていうのにな。とりあえずまぁ、こんな所でぼんやりしてるよりネットで雑学拾ってる方が有意義だろうってことは、隣でウトついてるおっさんも同意してくれるんじゃないのかな。

そうこうしてると、また例の感覚がやってくる。邪悪な好奇心が、神経系を焼き千切るかのように迸る。

ああ、このおっさんを急に殴りつけたらどんな顔をするんだろう――

一瞬ポカンとした後に、痛みを意識して、それから顔を真っ赤にしながらわめき出すんだろうか。そして周りの奴等はどうなるんだろう。何が起こったか分からずに唖然とする者、俺に向かって叱責の声を上げる者、怒りに狂ったおっさんを宥めに掛かるもの。まぁ沢山いるはずだ。そうしてそんなたくさんの表情の中に、俺の今まで知ることのなかったような面白い表情があるんだと、俺は信じて疑うことはないのだ。

と言っても、実際にそんなことをするほど俺は気がふれちゃいない。ただ想像の中で楽しむだけだぜ？　年齢制限のある映画といっしょだよ。俺は立派な十七歳、ちゃんと仮想と現実の区別は付いているのですよ。現実では虫も殺したことのない良い子ちゃんで、もやしさんなのですよっと。

ここで一個思いついたことがあった。人間最大の罪、そいつは好奇心なんじゃないのかってことだ。なにも俺のちょっとばかり歪んだ欲求だけが理由ではないぜ。よく映画とかで言ってるじゃないか、「お前は知りすぎたんだ」なんてさ。これは少しふざけた例えだろうけど、一理あるのでは？　と一瞬でも考えてくれる人が居てくれたら、俺は喜んじまうな。だってそうだろ？　人間が知恵を付けた原因ってのは、もしかしなくても好奇心に違いない。そんでもって知恵を付けた人間様共が何をやらかしてきたかは、お察しくださいってやつだろ。

だからって俺は好奇心を否定することは許さない。なぜならそいつを否定した瞬間にきっと人って存在は死んでしまうに違いないから。

故に俺は絶対に好奇心を捨てない。何が起こったとしてもだ。

そう、何が起こったとしても、俺は己の好奇心を止めることはないんだ。

天気予報が盛大に外れてくれたお蔭で、俺は昇降口付近で途方に暮れることになってしまった。自転車で通学してる連中はカッパを持ち歩いているらしいが、残念ながら俺は歩きだし、華の帰宅部のために部室に傘を置きっぱなしにしているなんてことは無い。親が迎えに来れる時間を待っているなんてことも、してられないだろう。となると、やはりずぶ濡れで帰るしか選択肢はない。「はずだった」って一言が付け足されることになるが。

「オペを開始する」

何の反応も返ってこないことを確信すると途端に悲しくなる。人が居ないから仕方がないことだと無理クリ納得できるが、もし人が居ても同じ状況なんだろうという余計な思考がどうしてもいけない。

さて俺が一体何をしているかというと、ズバリ、ポンチョを作っているのだ。仕方なく濡れる覚悟を俺が決めていた時だった。一人の自転車通学の生徒が帰ろうとしていた。その時、俺は見た。そいつが鞄をゴミ袋に入れて濡れないようにしていたのを。ここまで言えば、お察しだろう。学校とかにしか置いていないような尋デカいゴミ袋、そいつを拝借して頭を出す穴をブチ開けてやる。鈍ら鋏がビニールをもちゃりと切り裂く。これで多少はマシになるかな。髪とズボンの裾が濡れるのは確定だし、滑って転んでしまった場合に手をつけなくて大変なことになるだろう。しかし、少なくとも家に帰るまでの三十分間、俺の精神は救われるだろう。

首筋を伝って流れ込む雨水が気持ち悪い。いきなり理不尽な目に遭うのと思ったとおりに物事がすすまないこと、どちらが人を不快にさせるのだろうか。今日の俺は後者を推そうかね。

ところでだ、濡れて気持ち悪い以上に問題となる事態が発生しそうなのだが聞いてもらえないだろうか。この先をもう少し進むと所謂商業地区に入るんだ。たとえ雨の日であろうとも、きっとそこには多くの人が居るだろう。うん、そうだ。そんな人目がハンパ無いところで俺の格好はどうなのさ？　という問題だ。実を言うとこの危惧は校門を潜る時点で浮上していたのだ。だって傘を持ってるやつらを追い抜いていくときに、視線が突き刺さってくるんだぜ？　これはきっと不味いだろうな。

といった俺の不安は全く奇妙な形で裏切られることとなった。

またか、と割と大きめに舌打ちをする。さっきから何度とな

く人にぶつかっている俺がいる。こんな雨の日だ。ちょっとばかし前を見てないやつがいてもおかしくはない、事実俺もそうであったし。だがしかし、仏さんが怒り出すレベルで同じことが何度も起こるってのは異常と言っていいだろうよ。さらにだ、そのぶつかったやつは「一体何とぶつかったんだろう?」って表情で周りをキョロキョロし始めるんだぜ？　俺がすまねぇなって謝ってんのにもかかわらずだ。俺が見えてないのかよ。そう、どうもやつらは俺が見えてないようだった。こっちから態とぶつかるなどして実験した結果、俺はその常識を踏み外しかけた仮説を認めざるを得なくなった。中学の頃クラス中から無視され続けてきた俺だが、流石に街中の人間からハブられるってことはないだろうさ。しかも俺はつい数分前までこの格好により、悪目立ちすることをひたすらに心配していた。それが蓋を開ければどうだ。誰も俺が見えちゃいない。いやいや、決して、俺が変なやつに見えて関わりあいたくないとかそういう表情ではどいつもなかったのだ。そこは信じてほしい。ホントにただ単純に肩や前身にいきなり衝撃を受けて困惑している、そんな感じだった。

　とりあえず理由は分からないが、周りの人間に俺が見えていないと分かった。後は色々と詳しく検証をしていこうかなとか考えてる時点で、結構俺は正気を失いかけてたんじゃないかなってな。

　ただ、俺が正気じゃないってのは紛れも無い事実だった。

「おい、お前、何のつもりだよ！」

「はぁ？　あんた何言ってんだよ！」

　強面で大柄の男が髪を金色に染めた若者に掴みかかる。傘が二つアスファルトに投げ出された。突然の出来事に周りの通行人は困惑し、距離を取る。いや、困惑しているのが通行人だけではないということは、当事者二人のつい数秒前の表情を見た人間には分かることではあったが。この状況下で全く動揺を起こさない者といえば、俺しかいない。まぁ、高揚はするけどもね。しかし、眼光鋭い男がいきなり殴られたときに見せてくれた呆気に取られた表情っていうものは、俺の想像をいい意味で裏切ってくれた。その後の行動もまた、愉快なもんだよ。だってどう考えても可笑しいだろって相手に因縁を吹っかけるんだもの。俺は別にノートを落として遊ぶ死神じゃないが、人間の面白さについて再認識したね。そしてこうも思うのだ、この「透明ポンチョ」でもっと楽しみたい、と。

　衝撃的な体験をしたあの雨の日から二日経った。ちまちまと

実験と検証を続けてきたお陰で、「透明ポンチョ」の使い方がよく分かった。こんな現実にはあり得ないことにマジになってるってどんな阿呆だよと気にもならなくはないが、現実を、この目で見たことを頑なに否定するのも、それはそれで愚かしいことだと俺は思うんでね。それはともかく、このポンチョの効果についてだが、ご存知の通り身に付けた者を見えなくする力。これはあらゆる生物（勿論、俺の住む街にいる限りを調べただけだが）の視覚に効果するだけでなく、カメラにすら写らなくなるのだから不思議である。なんせこいつは開けられた穴に俺が首を通すまでは、普通に観測可能なデカいゴミ袋なのだから。

「Ph'nglui mgl'nafh wgah'nagl fhtagn」

「いやぁっ！　一体なんなの！」

「透明ポンチョ」の特徴その二。視覚的情報は一切遮断するも、その他の情報はそのままである。そのために、何もない空間からいきなり声が聞こえたり、勝手に物が動いたりなんていう現象を見せつけることが出来る。これがまた面白い。常識では理解できないような、空想でしか起こることのないような出来事に遭遇した人間の反応とは多種多様で飽きることがなかった。

今回のターゲットは隣の席の女子だ。「透明ポンチョ」を着てしまえば、ストーキングなんて朝飯前であるし、気配を感じて振り返ったとしても何も見えない。むしろ恐怖が膨れ上がるだけだ。それで今俺は彼女の家にお邪魔して、擬似ラップ現象を引き起こさせてもらっている。

「嫌！　何！　何なの嫌ぁ！」

この世の終わりのように泣き叫ぶ彼女。まぁ確かに家の中に一人きりのときにこんなことが起こったら、誰だって泣きたくはなるか。

どうやら自室に逃げ込もうとしているので、そっと後を尾けてお邪魔させていただく。思春期の女の子の部屋に勝手に入るなんてどうなのよ？　と自問するも、今の俺に倫理観を求める方が間違っているだろうと弁駁。

で、その娘の方を見遣ると――――あーあ布団に包まって震えちゃってるよ。さて落ち着くまで待ちますかね。

「ううぅ……お母さん、お父さん、早く帰ってきてよぉ……」

目を潤ませて扉を方に目をくれている。携帯はリビングに置いてきてしまったらしいが、もう一度取りに行く勇気はないようだ。カーテンを閉め、壁や扉に耳を当て、自らの心の平安を保とうとする彼女。なかなか愉快であるとか考えてる俺は人で

なし以外の何者でもないな。

少しは落ち着いたらしくPCを立ち上げようとしている。

ここで俺の箍の外れた心が一つの欲求を吐き出した。知りたい、人の絶望する顔を。なんと醜い、唾棄すべき、人の道を外れた好奇心なのだろうか。圧倒的自己嫌悪が降り注ぐ。だが、俺は笑っていた。ずっと前からの望みが叶えられた、と笑っていた。山頂から日の出を眺めた登山者のように、まるでその感情が清く純なものであるかのように、俺は、笑っていたのだ。

扉を強くノックする。彼女は驚き振り返る。扉をガタガタ強く揺らす。彼女は怯えて縮こまる。鍵をゆっくり回し開ける。彼女は息飲み涙を零す。おれは扉を開け放ち、持った泥玉を投げ放つ。彼女は狂って泣き叫び、喚き散らして暴れまわる。

中々面白かったと偉そうに感想を述べる俺。人一人狂わせておきながら、未だその暗い好奇心は止まることを知らない。

この好奇心は、そしてそれを実現するこの装置は、より多くの不幸を生み続けるのだろう。

ああそうだ、人間最大の罪、それはやはりその止まることを知らぬ好奇心と欲望ではないか。

混沌の踊り人

片桐　修

時計の短針がかちりと動き、時刻が午後五時になったことを俺に告げる。

オカルト研究部と書かれたプレートの下がる教室に独り、この教室でPCをいじり古今東西のUFOやら宇宙人やらに関する論文を読んで自説を某掲示板で展開する。たまに古典的宇宙人の本を読む。それがここ一年の俺の日常だ。

今はちょうど四月。一年生が一人や二人来てもいいのだが…部室棟の端。辺境にあるマニアックな部だ。今年も一人で一年間を……

「すいません。オカルト研究部の部室ってここですよね」

前言撤回。俺の一年間は、一人ではなくなりそうだ。

我がオカルト研究部に新入部員である碧眼の美少女「内藤亜里」が入部してから、一ヶ月が経った。俺たちの活動場所はインターネット、図書を利用しての調査研究にシフトした。というのも

「私、クトゥルフ神話に興味があったんです！」

との内藤の言葉からだ。

クトゥルフ神話とは。

アメリカの小説家H.P.ラヴクラフトが幼少期に見た夢を元に邪神と人の関わりが書かれたコズミックホラー小説群。その一連の体系を総称して、クトゥルフ神話というらしい。米国の内外を問わず、マイナーではあるがさまざまな作品にその設定が用いられている。ラヴクラフト以外の作家が書いたものも、クトゥルフ神話と体系づけられた最低限のものが入っていればクトゥルフ神話と呼ぶことができるため、個々人によって様々な解釈がされる。

「部費使えるっていいですね。クトゥルフの本って高いんですよー」

とにこやかに黒い長髪を揺らしてページをめくる少女。彼女を横目に俺もPCを使って国内のクトゥルフフリークの考察を読みあさる。今まで全く知らなかった世界だけあって見るものすべてが新鮮だ。

「クトゥルフの呼び声……TRPG？」

少し気になる記事があったので声に出して読み上げると、内藤が解説をしてくれた。

「テーブルトークRPGです。ダーレス氏が作り上げたクトゥルフの基盤が最もよく生かされた例ですね。有名な用語である「SAN値」もここから来ています」

オーガスタス・ダーレス

自身もクトゥルフ神話の作家でありながらラヴクラフト死後、アーカムハウス社を設立。現在のクトゥルフ神話の基盤とも言える設定をつくりだした人物である。評価は絶賛と酷評が半々。クトゥルフが消えずに済んだという功績もあればラヴクラフトの意に反するという声も。要するにどっちもどっちというやつだ。

ちなみにSAN値というのはプレイヤーに設定された「正気度」で、ゼロになると発狂するらしい。

次の日の部活動は、TRPG「クトゥルフの呼び声」だった。

六月の、雨の日のことだった。ふと、内藤が意味深な言葉を発した。

「先輩、もしも、クトゥルフに登場する邪神たちが本当にいたら?って、考えたことあります?」

「どうした？　急に」

「もし邪神がと急に存在したら、面白い反面、怖いですよね」

もし邪神が地球に存在したら

神隠しは、次元を司る邪神ヨグソ＝トースの仕業かもしれない。

中世ヨーロッパに存在した「錬金術師」や「魔女」も邪神かもしれない

南極には「古の者共」が住み着いていて、狂気の山脈で生を営んでいるかもしれない。

そこまでは面白いで済む話だ。でも、邪神の存在を真とするならば、最も背筋に寒気が走るのは……

「もしもですよ？　先輩。身近な人間が全員。千の貌を持つ邪神、ナイアルラトホテップなら……私たちは、奴らの手のひらで踊らされているだけかもしれませんね」

彼女のセリフはなぜか、嘘だとは思えなかった。

七月。夏休みを挟み、九月の半ばに文化祭を控え、オカルト研究部も研究発表の内容を決めるため会議の場を作っていた。

「というわけで、今年はクトゥルー神話についての発表なんだけど……どの邪神をメインにする?」

地球人に古くから関わりがあった旧神。有名どころの旧支配者、そして外なる神。この三柱のうち、ひとつに絞って発表をしようと思う。

「俺は有名どころだし……旧支配者で行こうと思う。生ける炎クトゥグアに黄衣の王ハスター……」

その言葉を言い終える前に、内藤の手刀が俺の首に当てられ、発言を遮られた。

「その名前を口にするの、やめてもらえますか？」

妙に威圧感のある内藤に従い、旧支配者を候補から外して「外なる神」をメインで調べることとなった。

調査が始まって、一週間。妙な事件が、近所で多発しだした。

結婚記念日に、妻に宝石を買った男性が自室で突然の発狂。後の脳死。

下校途中の高校生が路地裏へ引き込まれ失踪して、二日後物言わぬ姿で帰ってくる。その傍らには銀の鍵があったという。

変な夢を見たと言いながら高熱にうなされる同級生の美術部員。

「最近、妙な事件多いよな」

「ですね」

PC でレポートをパチパチ打ちながらそっけなく返す内藤亜里。

返答を曖昧に聞きながら外なる神の調査を進める。

ふと、ラヴクラフト氏の作品に、既視感を感じるものが数篇あることに気がついた。

銀の鍵を手に入れた者が、別の次元へ旅たつ。冒涜的な邪神アザトース、邪神ナイアルラトホテップを召喚する宝石。浮上する海底都市ルルイエの復活に伴う「想像力豊かな」人間の高熱。悪夢。

気のせいではない。邪神は存在して、この街で、俺たちに少なからず影響を与え続けているのだ。そうなると、不明瞭な点が出てくる。

アザトースは動くことを知らない。ヨグソ＝トースは次元の狭間に住まう。ルルイエは海底都市だ。

ナイアルラトホテップ。奴だけは、どこにでも存在できて、どんな貌にもなれる。

もしや、俺の周囲に存在する誰かが、ナイアルラトホテップ其の物なのかもしれない。そう思うと、

数ヶ月の間活動を共にした後輩が、急に信用できなくなった。

次の日から、俺は学校を休み、自室に引きこもるようになった。親さえも信用できないので、机でバリケードを築き、トイレと自室との行き来以外は部屋を封鎖。食料もしっかり買い込んだし、切れたら窓から出ていけばいい話だ。

一週間が経っただろうか、内藤が、俺の家を訪問した。ドア越しに、少し曇った声がきこえる。

『先輩、部活は、どうするんですか？』

「好きにやってくれ、俺はもう家から出ない」

このまま学校も、部もやめてしまおう。それが、邪神から逃げるには一番いい方法だ。

『先輩、面白い話、しましょうか』

俺の同意を得ず、話を続ける。

『外なる神ナイアルラトホテップは何にでもなれる。つまり、液体や気体にもなれるんです。つまり、這いよる相手が生きている限りは、どこまでも生き続けるんです』

その言葉を聴き終えるか否か。といったところで窓を割って外へ。裸足のまま街を駆け抜け近所で一番高いビルへ向かう。

屋上から飛ぼう。そうすれば、この悪夢とも別れられるはずだ。クトゥルー神話、あんなのと関わりさえしなければ、死ななかったのかもしれないと思ったが、俺の魂は、ラヴクラフトに触れた瞬間から、邪神たちに囚われていたのかもしれない。

ビルの屋上に着くと、内藤が先に来ていた。

「……どいてくれないか？」

「嫌ですよ。まだ、先輩のすべてを知っていません。私はもっと、先輩の絶望に歪んだ顔を見たいんです」

……今の言葉で、全てに納得が言った。

彼女が執拗に外なる神を強調し、ハスター・クトゥグァを拒絶した理由。少しずつ俺を追い込んでいくような発言。うら若き少女がクトゥルフにはまっていたわけ。

彼女が、彼女こそが、ハスター・クトゥグァと敵対関係にあって「外なる神」の一角、簡単にひねりつぶせる者も時間をかけて絶望へと導く、千の貌を持つ這い寄る混沌、

ナイアルラトホテップなのだ。

「お前が……ナイア……ゴホッ……グ……」

とたんに吐き気を催す。胃袋に入っていた少ない食品は全て外へ排出されて、苦い胃液さえも吐き出される。

思考力も、彼女の正体を悟った瞬間から退行を始め、少しずつ、過去の邪神との交流者がたどった道へと引きずられていく。

数分間、僅かな理性との格闘の後、一言だけ、言葉を残して、俺の意識はブラックアウトした

ナイア……内藤……ナイアルラトホテップは……アザトースの従者……亜里？

「内藤亜里……ナイアルラトホテップノ……アアアアアアアアアアアアアア！！！」

～～～

自分は主人公だ、と思ったことがない人間はいないだろう。より正しくは「そうあって欲しいと願ったことがない人間はいない」である。本やアニメの虚構の世界のなかで世界に最も愛された主人公に自己を投射し、羨望の眼差しを向ける。大抵の人間ならば途中で、己の価値の低さを、自分が平凡でただの世界の背景に過ぎないことを、世界を恨みながらも、その世界に存在する主人公を恨みながらも認めざるを得なくなるのである。

誰しも自分が世界に優遇された存在であると思いたいものである。確かに自分の意識は自分が主人公の一人称で物事が進む世界だ。他人に意識があるかを証明することは出来ないし、自分以外の人間全員が何者かによって、ともすればその世界の神に操作されている意識を持たない人形であるという三流ファンタジーのような愚かな想像も拭い切れないのである。

主人公に強烈な憧れを持つ人間が多数いる一方で、少なからず神に憧れる人間もいる。彼らの言う神とは、「世界を創造し稀に発生するバグに介入を行い自分の都合のいいように世界を進める人類側からの一切の介入を拒む究極的第三者」である。

この定義の「稀に発生するバグに介入を行う」という部分は、神の本質が第三者という位置づけであるにも拘らず必要不可欠な要素である。そもそも世界を創造する目的は、その世界で発生する物語を見るために過ぎない。世界の住人からすれば神は単なる観測者でしかないのだ。故に創造の後、介入を行い、世界を面白くしていくのだ。面白いか否かが神にとっては世界の存在価値を判断する唯一の基準である。場合によっては自ら世界を無かった事にしかねない。

世界というものはよく本に喩えられるが、世界が本に似ているのではなく、本が世界に似ているのだ。というのも、本を作る作業は世界を創ることと同義なのだ。主人公を選び、世界を設定し、自分の好きなように世界を進める。この場合、著者が神で、主人公は読者である。読者はその本という世界の中で「主人公」を仮想体験し、神の意思の通りに世界を生きる。

ここまで神と主人公と世界について話してきたが、神は主人公の存在する世界の中に存在することが出来ない、というのが前提の傍観者観測者第三者であった。

では、もしも神が主人公の世界があったら。

こんな抽象的で霞のように掴みどころのない前置きをもって

僕は哲学を始めようというわけではない。僕のいる世界を簡潔に鮮明に理解、想像してもらう為にこんな文章を書いたわけだ。

僕はこの世界の神で主人公だ。

より正確にいうと、僕は神になったことによって主人公になった。生理的嫌悪感を抱かざるを得ない程不愉快なグラデーションを伴った雲が空を我が物顔で牛耳っていたこと以外特に記述することのない、消化試合のような一日が終わりを迎えようとしているその境に、僕はそれに気が付いた。この世界が創造された瞬間からそこに存在していたかのように何の違和感もなく存在するその本に。

その本の表紙には「This world」と記されていた。中を開くと、僕以外に知りようがない僕の半生が事細かに記されていた（もっとも何割かの特筆すべきことのない日は省略されていたが）。その瞬間は驚きよりも関心が上回ったが、読み進めていくうちに驚きが上回った。「僕がその本を手に取り、中を読み関心をもったもしかしたら」という旨の文章が既に書き込まれていたからだ。

その驚きの中で、もしかしたら、という推測が僕の頭の中で渦巻き始めた。

言及するまでもないかと思うが僕は筆記用具を片手にその続きを書き始めた。

翌日、そのもしかしたら、という推測が当たっていたことを目の当たりにする。

何故その本を僕が入手出来たかは分からない。だが、僕はこう考える。

「神は僕を選んで、神の権限を委託した」と。

僕はその確信の瞬間までは前置きで話したような、主人公という存在への羨望を捨てきれない劣等感を抱きつつもそれを認められずにいた醜い存在である。だが、違った。僕は主人公だったのだ。神に愛された存在なのだ。選ばれたのだ。

本を手にして数ヶ月が経った。

世界が音を立てて崩壊した。

ぎっぎいいぎいっぎぃぎいいい

ꣻꣻ.

ꣻꣻꣻ

後書き

06

僕の住んでいるこの世界が誰かの書きかけの原稿じゃないことを祈っています。

ぎいぎいいぎっぎっぎいいいいいい。

え？

間違い

一二三　哲也

他人の失敗を責めること
悪いことを悪いと言うこと
違うか？違わないか？

正しいこと

一二三　哲也

正しいことは　都合のいいこと
正しいことは　自分の気に入っていること
正しいことは　周りが共感を持ってくれること

正しいことは　皆が気付いて始めて変わること

賢者の失敗

汐織　郷馬

むかーし、昔、ある田舎の農村がありました。村人たちは毎日、毎日、早起きをして畑の草を取ったり、筵を編んだりして暮らしていました。

でも、それも少し前までのことなのです。なぜならばこの村には賢者様がいるから。賢者様はこの村の村長さんの次男でした。小さいときからとても頭が良く、村のみんなから慕われていました。それだけならばよくあるお話です。跡継ぎとなったお兄さんを支えて、いろいろな村にいって難しい交渉事を片付けていったのでしょう。しかし、賢者様は賢者様なだけあって一味違いました。なんと、半年に一回来る行商人さんに付いて、お勉強のために村の外に出たのです。村人たちは期待と涙とを形見に、賢者様を送り出しました。

立派な馬車に乗って賢者様が村に戻ってきたのは、賢者様のお兄さんが村長となってその息子さんが成人した頃でした。賢者様は街でのお勉強では飽き足らなかったようで、砂漠を越えた先にある学問所で先進技術をたくさん、たくさん学んだそうです。なんとしかも賢者様はその学問所の中でも一二を争う優秀な成績を修め、たくさんの弟子をお取りになったのです。そして喜ばしいことに、賢者様はその弟子たちを引き連れて生まれ育った村まで戻ってきたのです。

賢者様が村にもたらしたものは途轍もないものでした。長老殿と呼ばれる人たちや村の重役は賢者となって戻ってきた愛する次男を快く受け入れましたし、若い衆たちも賢者様の恐るべき知性を窺わせる奈落のような黒い目と健康的に日焼けした人好きする表情に惹かれたのか、村人たちは喜んで賢者様の提案を受け入れていきました。そして、村は、すでに片田舎のどこにでもある農村ではなくなったのです。賢者様とそのお弟子さんたちが砂漠の向こうの技術を用いて、危険な森や山に関する正確な地図を作り上げたおかげで、村は薬草の有名な産出地に様変わりしましたし、その薬草のより効果的な調合の仕方も賢者様は村人たちに教えました。他にも、砂漠の向こうの学問所を真似た施設を作って、お弟子さんたちと一緒に文字や数学、科学を村人たちに教えました。そして学を得て街で活躍する者が出てきたことによって、賢者様の居る村として多くの人がやって来るのでした。

そしてまた時が経ち、学問所の教師がより増えて村もすでに小さな町と呼べるようになった頃、賢者様は村のはずれに庵を結び、深遠たる叡智を求める者をひたすらに待つようになりま

した。それはさながら物語に聞く大賢人のように。

そんなある日、賢者様が庵の中で思索に耽っていると、村に住む少年が慌てて駆け込んできました。

「悪魔が現れて、みんな魂を取られてしまいました！」

その報を聞いて、夜の森の静けさを映し出したかのような賢者様の表情が驚きへと変化しました。それもそのはず、悪魔というものは伝説の中の存在ですし、もし存在してその邪悪なる叡智を使ってしまえば、さすがの賢者様でも相手にならないでしょう。しかし少年の話を聞いていく中で、賢者様は落ち着きを取り戻していきました。どうやら現れた悪魔は無秩序に混沌を撒き散らすような悪魔ではなく、交渉の余地がある「正当な魂の取引」を持ちかけてくるタイプの悪魔のようでした。そのタイプの悪魔であるならば、賢者様も場合によっては悪魔を降し、村の人々の奪われた魂を取り返すことができるかもしれません。

覚悟を決めた賢者様は堂々と村の中心まで歩いていきます。取引を求めるような悪魔には常に毅然とした態度で臨むことが欠かせないのだと、砂漠の向こうで知り及んだ賢者様です。村の中央では遠い西の帝国の都市にあるような噴水が昼過ぎの日差しを浴びて美しく輝いています。そして噴水の側に設置されている卓に座っているのは、噴水の美しさなど馬に蹴り上げられた泥ほどにしか感じられなくなるほどの容姿をした悪魔でした。

「はじめまして。お目に掛かれて光栄です、賢者様。ご存知のように、私（わたし）は悪魔にございます」

王宮の楽団の演奏が放屁の音と同様にしか感じられなくなるような声で語りかける悪魔。その声を聞くだけで魂を差し出したくなる者もいるでしょうが、賢者様は全く動じる気配も見せません。それどころか、まるで物語の登場人物のように毅然とした態度と聖性で悪魔に向かい合います。

「いかにも、未だ道が極まったわけではないが、私（わたし）が賢者だ。今日は君と『取引』をするつもりでやってきた。お手柔らかに頼むよ」

「はい。勿論でございます。私は高級悪魔ですので、賢者様のお望みになられている『正当な魂の取引』をさせて頂くつもりでございます。ですが、その前に一つお尋ねしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「いいだろう――」

高級悪魔と聞いて、賢者様はさらに危機感を引き締めました。悪魔の中でも上位の存在ならば所有する邪悪な叡智も恐ろしい

ものになるでしょうし、単純に「取引」をする上での頭の比べ合いでも相当以上の実力を見せることは疑いありません。しかし何も悲観することばかりではないのも事実です。高級悪魔と「正当な取引」を成すことは配当の高額な賭けに勝つのと同じようなものです。よって上手く行けば奪われた村の者の魂を取り返せるかもしれないのです。

「――続けてくれ」

そんな状況下にあるからこそ悪魔の尋ねたいことには十分警戒をしなければならない賢者様なのでした。その脳内はあらゆることを想定して、時化の海のように荒ぶっていました。

「それでは失礼しまして。賢者様は人間が皆、等価値であるとお思いですか？」

時と場合によって答え方が変わってくるような質問でしたが、そこで質問に質問で返すほど愚かな真似をする賢者様ではありません。自らの信念を損ねず悪魔の意図を踏んだ答えを返します。

「そうだな。人の価値はそれぞれ独立して簡単に比べられるものではない。君たち悪魔は人を魂で見るようだが、それも同じことだ。魂は生まれ出る前は皆、本質的に平等だろう。しかし生まれ落ちた瞬間からの経験によってそれらは形を変えるものだ。それらはある物差しを用いれば優劣をもって区別される。故に等価値だとは言えないだろう。だが、それは物差しの問題であり、魂自体に優劣は存在しない」

悪魔はそれを聞いて、美しい唇の端を微かに持ち上げた後、答えます。

「ふむ、実に素晴らしくお優しく、賢明で狡猾なお答えですな。尋ねた私が愚かでありました。それでは『取引』に移りましょう」

そう言って悪魔はあらゆる芸術家が自害をするような麗美な笑顔を維持したまま、右手で目の前の空を掴む動作をしました。気付くと悪魔の右手には直方の箱が握られていたのです。

「賢者様はトランプなるものをご存知でしょうか？」

悪魔は箱の中に入っていたカードを手馴れた手つきで捌きながら尋ねます。

「ああ、知っているとも。それを使えば様々なゲームができるな」

砂漠の向こうの学問所で学んでいた頃に、賢者様はトランプのことを知ったそうです。それどころかかなりの腕前だったらしく、張り詰めた精神に多少のゆとりが生まれたようでした。

「それはいいことです。今回の『取引』は是非ともこれを使っ

て行いたいと思いましたので」
「なるほど。それではどのようなゲームをするつもりなのか聞かせてもらおうかな」
油断なく賢者様は問います。
「まあ、慌てずに。折角賢者様が私の質問にお答え下さったのに、その意図が分かっていらっしゃらぬ賢者様ではないでしょう。ゲームには賭けるものが必要ですからな」
「それが魂というわけか」
「そうです。本来ならば私と『取引』をしても人一人の魂では到底、村人たちの魂全てを取り返すことはできないのですがね。賢者様のような経験を積んだ魂はですね、私の使っている物差しでは幸運なことに釣り合ってしまうのですよ。魂の価値が、ね」
たとえ予想が出来ていて、自分もそれを利用した受け答えをしたとしても、改めて言葉にされて意識させられてしまうと、やはり賢者様でも不快感を隠すことは出来ないようでした。
その様子を見た悪魔は、どこか嬉しそうに言葉を続けます。
「しかし喜ばしいことではありませんか。あなたがこのゲームに勝てば、みんなが助かってまーるく治まるのですから」
悪魔のいうことも尤もだと気付いた賢者様は、憤りを鎮めて気を引き締めなおします。そして真剣な顔付きで続きを促しました。
「このゲームでは三つの『場』を使います」
そう言って悪魔は、チョークを使い石造りのテーブルにカードと同じ大きさの長方形を三つ書きます。
「左、中央、右とカードをおく場所がありますね。左の場に、強いものが下になるようにカードが重ねられています。そして賢者様はカードの山の1番上のものを、中央か右の場に移動できるのです。中央や右にカードの山ができた場合もその同様にして動かして下さいな。最終的な目標は右の場に、始め左の場にあったのと同じ順序でカードを重ねることです。カード移動の際の注意は、強いカードが弱いものの上に来ないこと。ちなみにカードの強さはＡからＫに行く方が強く、スペードが最強で、ハート、ダイア、クラブの順番に弱くなります。勿論、ジョーカーは最強ですよ。簡単でしょう?」
こう告げた後に、お手本を示すつもりなのでしょうか、悪魔はスペードのＡ、１０、Ｊ、Ｑ、Ｋの束を左の場から右の場まで、Ａの上に１０が来ないように、Ａ、１０の上にＪがこないようにしながら移動させ、左の場にあった山を右の場に復元させました。それを見た賢者様は一つのことに気が付きます。賢

者様は砂漠の向こうの学問所で「関数」という概念を学びました。そして悪魔の出したゲームもこの「関数」に当てはめられるのだということに気付いたのです。

「ああ、できるな。やろうか。その『取引』を受けよう」

「それではカードを端から端まで動かせたら、村人皆の魂を元の者に返し、動かせなければ賢者様、あなたの魂を貰い受けます。それでは、このトランプ五十三枚、左から右まで強いカードが弱いカードの上に来ないように動かして貰いましょう」

悪魔はその美しい顔を、まるで天地がひっくり返ったかのように、醜く歪めて嗤いました。

むかーし、昔、あるところに賢者様の住む、豊かな村がありました。その村はたくさんの役人や教師を輩出することで有名な村でした。しかしそんな豊かな村も、狡猾な悪魔の手に掛かって、人っ子一人居なくなってしまいました。

雨の日

一二三　哲也

一

外へ出ると、雨が降っていた
雨具は持っていなかった
とあるお店の軒下で
雨が弱まるのを待つことにした

二

目の前を、風船が転がっていた
赤くて小さな風船だった
持ち主のいない、小さな赤は
雨に、寂しく打たれていた

三

雨は、弱まりそうになかった
足を動かすのは、冷たかった
冷たい後ろを振り返ると
赤はそこに、もういなかった

おんぼろアパート

一二三　哲也

窓は開けて、障子の破れた
二階建てのおんぼろアパート
「誰か住んでいるのかなぁ」
「住んでいたら、寂しいなぁ」

柱は錆びて、塗装の禿げた
町のはずれの、おんぼろアパート
「誰も住んでいないのかなぁ」
「住んでいなかったら、寂しいなぁ」

合作

僕は代理なので直接宇賀神みつき本人に聞かないとわかんないんですが、
丹精込めない力作であり、丹精込めた駄作でありますので
そのへんのニュアンスを兼ねたい言葉なんかありませんよね？

宇賀神 光輝　さん
相田 くさを　さん
他 1名　さん
（連作及び合作）

「いろんな太郎シリーズ」

ゲゲゲの鬼太郎
桃太郎
山太郎
麻生太郎
石原慎太郎
とっとこハム太郎
キャベツ太郎……
この時代に生きるすべての太郎さん、頑張れ！！

「なぜ山に登るのか……」

そこに山があるから……

「2062」

私は、2062年から来た。名前は、まだ言えない。
なぜ、この時代に来たのか？
それはさておき、この時代はとてもいい時代だ。食べ物は美味しいし、自然もある。
俺のいる2062年は、食べ物はパサパサだし、町は殺風景だし、もううんざりだ。
ここで、一つ言っておきたいことがある。それは、書物を大切にすることだ。なぜかって？それは、あとあとわかることだ。
おっと、もう時間だ。調査に出かけなければ……
最後に、これから来る激動の時代を乗り切ってもらいたい。
あなたたちがいて、私たちがいる。
では……

「邪馬台の詩」

雪と闇夜、鳥啼きし。ふと卑弥呼が眠りから無意識に家の異変肌で知りし。気は騒ぎ、潮騒似て。「おのおの、起きよっ」……狗奴では？
手人の卑狗の来て告げゆ。「永遠邪馬台の眠る血をかき立てきしが、奴（な）の地の見たことを！人負けにしは、貴ぶ神や西の家に崩ず。今は形見惜し。山焼く狗奴の兵の見た。敵が来て、民の家のなく、悔やまや。死を見、鷹は舞い、数歩に兵の死に、病み、兜を飛ばし逃げまどひ、男、民の血の流しきて滝が落ちる。胸の痛まやは」と。
「行けっ」。敵の首の飛びて、果てなく強き斧。斧を手に勲しき技、歯ぎしりしてた蛮兵の塀に来し居。群がり、棟囲み、火飛ぶ。
「死期なり。台与、見や」と消ゆ。

死の悼まや。

「アイスピック」

先週、職場の近くで殺人事件があった。
若い女をアイスピックでめった刺し。
しかも普通のアイスピックじゃない、
業務用の三本歯のやつでだぜ？怖いだろ。

小さな町だから、どこに行ってもその話で持ちきり。
マスコミも大きく取り上げてる。
滅多にない大ニュースだから無理もない。
うちのばあちゃんは、可哀相なくらい怯えて、
毎日何時間も仏壇の前で手を合わせている。

警察は、まだ凶器すら判明できないだとよ。
まったく馬鹿にしてるとしか思えないね。

「おっ π」

Kは非常に燃えていた。そして3秒の間、深く熟考した。これまで自分が経てきた数々の苦労、そして困難を乗り換えた日々が涙と鼻水と鼻血とともに溢れ出してきた。

Kは IQ が西暦の数値を上回るとされる頭脳集団 MENMA の入団試験、そのなかで数々の生存競争をくぐり抜け、みごと最終問題 5 へと辿り着いたのである。

なんとしてでもクリアしなければならない。そのためには、一瞬たりとも思考を誤ってはいけないのだ。

Kはおもむろに問題へ目を向けた。

5 直径がおっ cm の半円がある。この半円の周りの長さは □ mm である。

このとき □ にあてはまる式を「おっ」を使って表せ。

ただし円周率はπとする。

Kは一瞬焦った。単なる数学の問題であったからだ。
そして、いけると確信した。

直径が「おっ cm」の半円なのだから、(おっ)× π×0.5 に違いない。
よって答えは

A　0.5おっ π

である！！！！

とか考える可哀想な猿はいないだろうかと一瞬、K は想像し苦笑した。

そして、そんなことを考える野郎は本当に哀れだ、と心から同情する慈悲深い自分に陶酔した。

少し考えれば分かることだが、半円の周りの長さは弧の部分だけではないのである。

つまり、半円の直線部分、直径の おっ cm の部分を加えなくてはならない。

A　0.5おっ π＋おっ

Kは自らの出した答えに心底満足し、優越感に浸った。そして、何度も読み返した。

しかし、そのうちに何かに気付いた。

0.5おっ π＋おっ、0.5おっ π＋おっ、0.5おっ π＋おっ、0.5おっ π＋おっ……

0.5おっ πたすおっ、れーてんごおっ πたすおっ、れーてんごおっぱいたすおっ！！！！

ぬわっっ！なんという卑猥な問題、非常に陰湿でイヤラシい、

隠されたメッセージを読み取ったKは、興奮した面持ちで答案を提出した。

が見事落第した。

いったいなぜだろうか。

簡単ですよね。誰もが気づくでしょ。当たり前だよね。

この問題の単位を見るんですよ。

直径は おっ cmですよね。でも、□mmって書いてありません？

そうなんですよ。この問題、さっき出てきた答えを10倍しなくちゃいけないんですね。

5おっ π＋10おっ

なんですか？そんなの分かってたって？　俺はもともと正解だったって？

そうですか。

残念ですが答えは卑猥なんかではないんですよ。非常に普通の答えです。

簡潔に言うとπは数字ですので先に持ってきて書くんですね。

だから答えは

A　5πおっ＋10おっ

ってわけです。

残念ですがオチはここまでです。さようなら、

卑猥な題に詐称された？　文句があるなら勉強してください。

♨

♨

最高責任者　宇賀神　光輝　さん

すべての文句はここに集結します。

片桐修

※　この物語は実際に起きた事件を下にとあるラジオDJが妄想したものを文章に書き起こしたものとなっております。実際の人物、団体とは一切関係ありません。

西暦2009年秋、有名洋菓子チェーン店「不二家」のマスコットキャラクターであるぺコちゃんが暴力団組員の手によって盗難された。動機は諸説あったが転売説がその多数を占めた。しかし、ぺコちゃん盗難事件には、知る人ぞ知る真相があったのである。

夜分、寺山田は走っていた。ただひたすら、駅前の洋菓子店「不二家」に向かって。

『オヤジ！　死んじゃダメだ、あんたはまだ逝くようなタマじゃないだろ！』

『おじきいいい！　死なないでくれえええ！』

寺山田を含め、多数の、暴力団「甘党組」団員が慕う組長、松濤啓吉（しょうとうけいきち）は、末期のガンに蝕まれ、今日が峠というところまで来ていた。

病床に伏せる啓吉は、ふとつぶやいた

『最後にぃ……ぺコさんに……会ってみてぇな……こんなごろつきにも、変わらない笑顔を向けてくれた……おらぁその笑顔が見られれば、心おきなく死ねるってもんよ……』

甘党組若頭として、街で喧嘩に明け暮れていた自分をここまで押しあげてくれた父のような存在の啓吉のため、ぺコさんを連れて行くために、不二家へと走る寺山田。

自動ドアが開くのに気づき、不二家の店員のぺコはドアの方を見る。

「どちらなの？こんな遅くに……あら、寺山田さんじゃないの。珍しい。今日はどうしたの？」

「オヤジが……松濤啓吉が、今日が峠で……最後にどうしてもぺコさんに会いたいと……」

「啓吉さんが……？　この間まで元気で、組の皆さんにって、たくさんケーキを……」

啓吉は大の甘党である。組員に不二家でケーキを買う際にぺコに会う。これが闇の社会で生きる啓吉の数少ない光であった。

ややあって、ぺコは寺山田の方に向き直る。

「分かりました、行きましょう、でも……」

ぺコにもまた、愛する人がいた。契りを結んだ夫、ポコであ

る。
「行ってやりなさい、ペコ」
「あなた！」
工房の奥からポコが出てくる
「松濤さんに、私のケーキを、そして、私と同じものを愛した人に、あってきてあげなさい」
「あなた……寺山田さん。行きましょう」
走るペコ、そして寺山田。しかし不幸にも、寺山田の下に一本の電話、舎弟の佐藤だ。
「どうした佐藤。まさかオヤジが？」
『大変ですアニキ！　オジキが、オジキの容態が急変して……』
このままでは間に合わない、寺山田は腹をくくった
「ペコさん、失礼します」
ペコを背負い夜の街を全速力で駆け抜ける寺山田。
走れ寺山田。松濤啓吉の死に目に、ペコを引き合わせることはできるのか！

曇り

雲が、空を漂っている
湿った風が心地よい
電線の上で、小さな鳥が
可愛らしく鳴いている
高架の下を通り過ぎ
民家の間を通り過ぎ
開けた道で、車を止めて
静かな空を眺めてみる

人は、隣を通り過ぎて
不思議そうな顔をするけど
僕は、そんな人を見て
かわいそうだと思うなあ
青く染まる雲の中に
黄金色が見えている
いつもいつも、急いでいるけど
たまには周りを見てみなよ

一二三　哲也

ペダルをこぎ出し、帰路につく
湿った風が心地よい
薄暗い道の隅っこで
草が、静かに揺れている
静かな風と、静かな空と
静かな草と、静かな夕方
曇りの天気も悪くないなと
そんな感じの、帰り道

雨に打たれ

一二三　哲也

それ程までに 皆揃って
心のままに物を追い
それ程までに 皆急いで
時の流れに縛られて
お前達は 何を求めるのか
この平穏が嫌いなのか
お前達の求める喜びは
果たしてそこに在るのか
見ろよ この雨を
梅雨の静かなこの雨を
粛々と降る この雨に
お前達は気付かないのか
雨の心はいつだって
そばに 在るということに

ライトノベルの悲劇

村島　康平

「だから僕はライトノベルなんか嫌いなんだ」

・・・

「ごめん、読み終わらなかった」
夏休み明けでいいよ、そう言おうとした時、僕の脳裏にある一つの考えが思い浮かんだ。
「僕の家まで持ってきてくれない？」

「三時くらいに行くね」
彼女からメールが来た。僕は慌てて部屋を片付けた。顔を洗い、寝癖を直し、ダサいパジャマを脱ぎ捨てた。
時計を見るとまだ二時だった。だが、いてもたってもいられない僕は、思い切ってメールした。
「早く返して」
本当は本なんかどうでもいいんだ。返してくれなくても何の問題もないんだ。早くしてほしいのは、本の返却じゃなくて……
時計の針はやたらと遅く進む。何も手につかない僕はずっと時計とにらめっこをしていた。
三時十五分前……まだ来ない、さすがに早すぎるか……十分前……まだ来ないのか……五分前……そろそろ来てもいいはずだが……
ついに短針と長針が直角になった。
どうしたんだろう。
彼女に電話してみたが、応答はない。道を間違えたのかもしれないと思い、家を出た。
彼女がたどるであろう道のりを進んでゆく。どこで間違えたんだろう？　そこまで複雑な道筋ではないのに。遠くで救急車の音がした。彼女の身を案じる気持ちがサイレンと同調する。ああ、うるさい。少し静かにしていてくれよ。僕には大事な探し物があるんだから。
しかし歩みを進めても彼女はみつからなかった。どこかで行き違いになったのかもしれない。もう少し進んだら引き返そう。あと二百歩だけ歩いてみよう、と決めた。

それはちょうど百七十歩ほどで到達した場所だった。大通りに人だかりができていた。まだ、二百歩進んでいない僕は人ごみを尻目に残りの三十歩を歩こうとした。人だかりの隙間から見えたのは救急車だった。恐らく先程サイレンを鳴らしていたものだろう。僕を苛つかせたあのサイレンだ。この野郎め。
そう思う間にも僕は歩いた。残り二十歩……もう少し……十五歩……十歩……あとちょっと……五歩……彼女はいない。
「どいてくださーい」

うしろで救急隊員の声がした。事故の被害者は誰だろう。せっかくだから見ておこう、と僕は背伸びした。人ごみに隠れてよく見えなかった。救急車の中に運び込まれ、ストレッチャーが持ち上がった時、その被害者の顔が一瞬見えた。僕がずっとさがしていた人の顔と同じだった。

僕が彼女をせかさなければ――

僕はただ、少しでも早く彼女に会いたかった。そのためにあんなメールを送ってしまった。

殺人犯になってしまった気分だった。それも、一番大切な人を殺めてしまったのだ――

こうして僕は大好きだったラノベを読まなくなった。あの惨事を思い出してしまうから。

「だから僕はライトノベルなんか嫌いなんだ」

あとがき

村島　康平

僕はあまりライトノベルが好きじゃないんです。もちろんそれは僕の好みの問題ですから、ライトノベルそのもの、あるいはライトノベルが好きな人を否定するつもりは一切ありません。

さてこの物語なんですが、実は右のような僕の考えにもとづいています。具体的に言うと、書き始める前に次の二つのテーマを設定したんです。テーマのある方が書きやすいので。

・「ライトノベルが嫌い」

・「ライトノベルを否定しない」

さあ、困った。この二つを両立させるのは難しい。でも、実際に書いてみると意外とすんなり書けちゃいました（笑）

文章は短いけれど、工夫はたくさんしたつもりです。そのあたりに注目していただければ幸いです。

追伸：村島康平ってペンネームじゃないんです。本名です。ペンネームは使わないのが僕の主義なんです。変な主義ですね、ハイ・・・。

哲学するプログラム

汐織　郷馬

『重力干渉圏から離脱。これより跳躍の準備に入る。跳躍予定は二時間後のチャージ終了から、一秒間に六回の跳躍を三分行う』

シートベルトを外し、男は各機器の点検を行う。と言ってもモニタに表示される数値を確認し、問題の有無を確認し報告を上げるだけなのだが。機器は余程の問題がない限り自動修復を続けるし、重大な問題があれば艦の中央人工知能が対策を講じてくれる。故に、わざわざこんなことをする必要はないのではないか、という考えが男の思考に出現する。しかし男に与えられた知識は、人が手ずから確認をすることによって機械トラブルによるミスが避けられる、と反論する。

（体の八割が人工物の身で何を考えているのだ――）

結局のところ、今自分が行っている作業も、艦の絶え間ないモニタリングも何の違いもないではないか。いやむしろ積んでいるCPUの性能から考えれば、己のチェックなどなんの役にも立たない。そういった結論に男は漂着する。しかしそのような考えも――

（バクチェック施行、完了。データ管理施行、完了。人工知能の起動テスト――）

――日々のルーティンの中に埋没していくのであった。

男の名前はイントゥイチオといった。カストル系の窒素酸素混合大気惑星に生息する二足歩行の抽象思考生物、俗に言うカチュン星人であった。六十年ほど前に開拓宙間移動艦スチボレモ号が惑星カチュンに着陸したとき、彼は羊を追いかけているだけの慎ましい生活を送る農民であった。だが彼の両親共々スチボレモに収監され、様々な実験を受けた。そして体の八割、脳も一部を除いてイントゥイチオを捕らえた者たちが作り出したものに交換され、「文明化」された。もちろんそれについて恨み、怒り、絶望し、感情が焼き切れそうにならなかったことなどない。事実、何度も何度も暴れた。それは彼の脳の残された部分が感情と第六感を司る部分なだけでなく、「文明化」された結果手に入れた高度な知性の判断でもあった。だがしかし、その「文明化」され植えつけられた理性と合理を求む心は、ただ単に怒り暴れるという行為に好意的な解釈をなさなかった。

「ヘロー、インティ。哲学してるかい？」

イントゥイチオが図書庫に行くと、そこには一人の先客がいた。その容貌はカチュンでの常識では異形と

呼べるようなものだ。他の星の生命体が、ケラエノ系第四惑星セラエノにて全宇宙に波及するほどの文明を築き上げたこの生物を形容するのは難しい。タイヨウ系の惑星アースに存在するアリとカマキリと呼ばれる生物を融合させ歪ませ、外骨格を黒光りする鎧に交換し、直立歩行が出来るようにバランスを整えたものと説明するのがようやくである。もちろんセラエノ星人からしてみれば、カチュン星人の形容の方がよっぽど難しいのであるが。ちなみにセラエノ星人視点でイントゥイチオに声を掛けたもの――ニコロを形容するのならば「力強い大きな顎と知性ある複眼を具えた美丈夫」である。

「ああ、だが、忘れた」

ぶっきらぼうに答えるイントゥイチオ。それもそうであろう、なぜならこの黒光りするセラエノ星人こそがイントゥイチオを「文明化」した張本人なのであるから。

「そうか。まぁ元々君の人工知能は判じ物に向いてはいないからね。でも、僕は、一見して結果も意味もないようなものも大いに認める人間だから。なんたって我々は『進化』できるじゃないか。ねぇ、そうだろ？　イントゥイチオ」

節を持った科学者は顎をカチカチと打ち合わせて、流暢に言葉を紡ぐ。その間、頭から数えて一対目の腕は本を捲り、二対目の腕はコンソールをてきぱきと操り、三対目の――二メートル近い巨体を支えるために存在する隆とした脚は、優雅にも組まれていた。

「借りていくぞ」

黒光りするセラエノ星人は一応イントゥイチオの上官に当たるも、カチュン星人はその苛立たしげな態度を変えるつもりはないようだった。体のバランスからすると大きめではないのだろうかと疑われる手を、鉛色に鈍く光る一メートル強ほどの高さを持つ四角い物体の上に添える。イントゥイチオの指先まで通る神経は、この開拓船に全体に張り巡らされている伝導回路と同じ物質に置換されている。これは彼だけでなくスチボレモ号のクルー全員に当てあまることで、黒光りする科学者も例外ではない。結局それによって何が起こるかと言えば、図書庫のデータベースを司るツールに手を触れるだけで、探している資料が瞬時に手元まで送られてくるのだ。図書庫のバイオコンピュータが利用者の脳に検索を掛けることによって。

（バイオコンピュータからのアクセス申請、許可。思考系へのアクセス申請、許可――）

この瞬間を振り返る度に、彼はどうしようもない嫌悪感に襲われる。

人工知能は「文明化」以前の知識と思考パターン、そして後から追加された情報、命令の質や順番によって個体の「人格」を決定する。そうした中、イントゥイチオに与えられた「人格」は所謂インテリ層のそれと似通ったものであったようだ。それ故に彼は思索を好み。それ故に彼は書を好み。それ故に、彼は、己が機械だと認めたくはないのかもしれない。

「好きだねぇ、君は。アース星の文学かぁ、ミ＝ケレダス＝フラマータ星の詩が僕は一番だと思うな。あの綱渡りをするかのような表現は、うん、脳が震えるって感じだね」

「そうか。俺の好みに口は出さないで欲しいな」

「おぉ！　『俺の好み』かぁ。君も成長したんだね。いいよ、いいよ。開発者として嬉しいな、君がそんなことを言ってくれるなんてさ」

科学者は、聞いていて吐き気を催しそうになるほどリズミカルに顎を打ち鳴らして、その歓喜か嘲りか判断のつかない感情を、本人に言わせれば、さらけ出す。さらに、よく目を凝らして耳を澄ませれば、その鎧のような外殻が細かく振動し、ブンブンと音を立てているのに気付くセラエノ星人とよく関わっている者には以上より次のことが分かる。「彼は嗤っている」のだと。

「黙れよ」

イントゥイチオは不快そうに表情を歪めて短く言い捨てる。そして鉛色の箱から出てきた分厚いハードカバーの本を掴むと、大股で部屋を後にした。彼の耳と聴覚センサには、まだリズミカルなセラエノ星人の嗤い声が、響いていたのだった。

デジタルがいくら発展しようともアナログは存在する。むしろ、デジタルが発展しすぎたためにアナログ崇拝が生まれることもある。この宇宙統一時代において紙を媒体としたものが幅を利かせているのもそういった理由からだ。情報技術が発達するにつれ、データは攻撃を受け、流出し、改竄されるようになった。時には虚偽のデータを受信したばかりに宙間紛争が勃発することもあった。そんな中、燦然と光り輝くのが紙とインクだった。物質的に形が残り、原子レベルで同じものは偽造できないとあって、オフィシャルな場面や何らかの付加価値を求める際に重宝された。スチボレモ号に収容されている書籍も紙ブームの例に漏れず、蔵書の百パーセントが紙媒体――つまりはアナログなものだった。

（俺も、アナログ崇拝の一角なのかもしれんな）

するりするりとページをめくる音がする中、イントゥイチオの思考の一部はそのようなことを考え始めていた。イントゥイ

チオを含むカチュン星人はスチボレモ号の中で特異な存在である。イントゥイチオはことあるごとに彼は自らの体の八割が後付けの人工物であることを憂いていたが、スチボレモ号のクルーの大半は百パーセント人工物で構成された肉体を持つ者であった。先ほどイントゥイチオと愉快そうに会話をしていた科学者も、イントゥイチオが生まれる何世紀も前に体を全て手ずから作成した人工物に交換している。それどころか脳も特殊な人工知能に移し変え、何事もなかったかのように数百年間宇宙を端から端まで探索しているのが、ニコロとその愉快な仲間たちなのである。そういった中で、たとえ二割ほどであったとしても天然オリジナルの肉体を持っているということは、それが相対的な判断であったとしても、イントゥイチオがアナログであると自己定義することの強烈な根拠になるのである。

イントゥイチオが文学に親しむと共によくすることがある。それは、逆説を弄するということである。現在彼の読書を除いた思考を占めている逆説は――――

(俺はアナログであるが故に、誰よりもデジタルなのでないだろうか)

――――ということだった。

他のクルーは自分がデジタルであることを意識せずにアルゴリズムを働かせ、理性的かつ情緒的な思考を生み出しているのだろう。それはもう、あたかもアナログの思考を持った生の人間であるかのように。

(それに比べて俺はどうなのだ)

アナログな面を持っているからだろうか、イントゥイチオはどうしても己のデジタルな部分が気に掛かってしまう。それは一種の呪いのようなものだ。視界に入る自分の鼻先が気になってしかたがないように、ふと舌の置き場を忘れてしまったかのように、呼吸の仕組みが、どうしても心に掛かってしまったかのように、イントゥイチオは自らの行動すべてにぎこちなさを覚えてしまったのだった。それ故に、彼は自分の意識を構成するアルゴリズムについて意識してしまう。そして何が悲しいのか、埋め込まれた人工知能の作り出す彼の自我は、逆説の森の中に迷い込んでいってしまう。

『エネルギー供給、予定通り進行。跳躍まで残り四十五分』

不意に流れたアナウンスがイントゥイチオの思考を現実に引き戻す。

(やれやれ、また何時の間にこんなに時間が経ったのか)

小気味いい音をぱたんと立てて本と閉じ、「食事」の準備に入るイントゥイチオ。とは言っても歓談室に設置されている自販

機のような物体に手を触れるだけなのだが。ガタン、ガタン、ガタンとある程度の硬さと質量のあるものが連続で落ちる音が響く。大きめな手でそれら赤・青・黄の線の入った缶を掴み上げ、まずは赤い缶の栓を開ける。脂っぽい匂いが鋭敏な鼻と嗅覚センサをつく。そしてその中身をアース星でいうオオカミを連想させる口に流し込む。味蕾が残されている人種のことも配慮してか味付けは申し訳程度にしてあるが、脂っぽい匂いに甘ったるい味はどうしても合わないらしい。イントゥイチオの舌は否定的な反応をするよう脳に訴えかけてくる。その訴えを機械的に却下し、青い缶を開ける。青臭さを堪えて液体を飲み干し、一息をつくイントゥイチオ。クルーにアース星人がいる艦の食事は恐ろしいほどに手が込んでいて美味であるという知識があるも、イントゥイチオの食事の記憶は遠く昔に埋もれたオートミールとここ六十年変わらない離乳食のような栄養管理剤のみである。言葉ではそういったものを要求してみても、実情は知らないのであるから虚しいものだなとイントゥイチオは嘆息する。

「ヘロー。サー・イントゥイチオ。失礼します」

「ヘロー、センティオ。この前薦めた本はどうだったか？」

青の缶をリサイクル設備に放り込み黄色の缶に取り掛かろうとするとき、イントゥイチオに話しかけるカチュン星人がいた。小柄ながらも引き締まった筋肉とそれを覆う灰色の毛並みの大部分は黒を基調としたスチボレモ号の船服に隠されている。その頭部はかつてアース星に存在した獰猛な生物とされているオオカミに酷似しているらしいが、イントゥイチオからすればただの内向的な青年の姿そのままである。むしろ同じくアース星の被捕食者であるウサギに似た耳がだらりと垂れ下がっているのをみると、微笑ましさしか感じられない。であるはずだが、イントゥイチオはこのカチュン星人に複雑な思いを抱えるのだった。

「はい、とても良いものでした。読点や接続詞の使用方法が独特で、大変参考になるものです。内容も、兄弟愛について書かれたものの中でも一、二を争うものでした。薦めていただき感謝します、サー・イントゥイチオ」

リズム良くスタッカートの利いた明瞭なセラエノ語で本の感想を語る青年。それはイントゥイチオのどこか詰まって篭ったように訛った、カチュン星人独特の発声によるセラエノ語とは一線を画すものである。このことはイントゥイチオの憂鬱をより加速させた。

（兄弟か――――）

どこか遠い目をするイントゥイチオ。その視線は目の前に立つ青年を貫いた後に、空間跳躍数百回と離れたカストルに向けられているようであった。

イントゥイチオ、その名前はカチュン星で二番目に大きい大陸では珍しいものではない。元々は一族の長となるものに、冴え渡る直感によって一族を繁栄へと導いてほしい、という願いを込めて付けられていた高尚な名前だったようだが、イントゥイチオの曽祖父の時代には単純に一家の長男によく付けられる名前でしかなかった。ついでに言ってしまえば、イントゥイチオが生まれた頃にはそのような名前はもはや古臭いものとされ、都市部ではほとんど使われなくなっていた。

そのようなわけで、イントゥイチオは子宝に恵まれにくい羊飼いの一人息子として長閑に、しかしながら責任を持って暮らしていた。だが、慎ましくも不満のない日常は、巨大な銀色の紡錘形がカチュンの空を覆ったのを期に終わりを告げた。スチボレモ号にとっての記念すべき第一村人は、なんとイントゥイチオであった。少し開けた場所で羊を放していたイントゥイチオは、銀の紡錘形から降下してくる虹の色をマーブル状に掻き混ぜた完全な球体を目撃する。そしてその球体は空を転がるという理解不能な動作と共に、流動する虹の色に気を取られている羊飼いの前にやってくる。球体はたどたどしい口調で話し出す。

「空の先の間々を開拓し、移動する大船、ᏍᏆᏓᏅᏏ（スチボレモ）。その、独り立ちして、動き、調べて回る、動力を受けて仕事をするもの、である。謝るが、唐突を、協力が欲しい、君たちの」

抑揚やアクセントもおかしく、言っていることも回りくどかったが、イントゥイチオはこの奇妙な物体が自分に助けを求めていることを察する。

「助けとは何だ？　そもそも何だ、その体と話し方は」

無知な羊飼いは未知の物体へあまり戸惑わなかったらしい。むしろ慈悲深いことに、その鬼とも蛇ともつかぬ者の求めを受け入れようと考えていたようだった。

「異なる、手間が掛かる、ことと。あれの内部で、動かないこと、黙ること、落ち着くことが、されている、求めることを」

どうやらこの派手な発色の球体は宙に浮いた奇妙なものの中で自分にじっとしていて欲しいらしい、ということを数秒かけてイントゥイチオは理解した。やはり実は気が動転していたのだろうか、あの銀色の大きな種はなぜ空が飛べるのだろうか、あれに中なんて存在するのか、という疑問が思い浮かんだのは

快諾し虹玉が礼を言ったときだった。

自分は悪魔にでも騙されてしまったのだろうかと、粘体生物たちがイントゥイチオの周りで忙しそうにしている中、思い悩む。白を基調とした自宅よりも大きい部屋の中で、イントゥイチオはぼんやりと天井を見つめていた。時折粘体生物たちが黒板を引っかくような声をあげる。おそらくは会話をしているのだろうと交易語を話せない羊飼いでも思い至る。しかしその会話は聞いていて理解出来ずにもどかしいという次元を超えて、耳障りで仕方がなかった。やはり来るべきではなかったかと羊飼いは後悔していた。

「ᏣᎳᎩᏗ ᏣᎳᏅᏗ ᎤᏪᏥᎯᏳᎲᎭ（ちょっと失礼しますよ）」

プルプルとした感触をしたものが体をまさぐる。夏場の水溜めのようなぬるさが皮膚から伝わっていく。もっと冷たければ気持ちがいいのではないか、言葉が分からない上に耳障りなので話しかけないでくれないか、と内心愚痴らなければやっていられなくなっていた。

「うおっ」

だからといってこの粘体どもが貼り付けてくる、ひんやりとした硬いのか軟らかいのかつかないものも気に入りそうにない。体の数箇所を違和に押さえつけられるだけでここまでの不快感を覚えるのか、となんとなく感心してしまうイントゥイチオだった。

それより先は騒然としていて、亡羊としていて、あまり「憶え」ていなかった。

現在のイントゥイチオには記憶・記録・知識という三つの脳内の情報管理上の区分がある。知識は定期の更新によって人工知能のメモリに蓄えられるものであり、記録は個人の行動をそのままに保存したものである。それでは記憶とは何なのであろうか。人工知能もどれだけ発達したとは言え、結局のところコンピュータの一種である。それ故、重要なのは蓄積された知識と記録であって、本能や「人格」によって情報が歪められてしまうような記憶が必要とされる場面は少ない。特に軍隊的規律が求められる調査船の中ならば。しかし調査船のクルーも故郷に帰れば家族や友人とのふれあいがある。そのような場面で一と〇でのみ構成されるような言動ばかりしていては、途端に関係が崩壊してしまう。それを防ぐために、人工知能には「人格」という要素が搭載されているのだ。

さて、イントゥイチオに宇宙船で検査を受けた後の記憶はないと言ったが、記録と知識は否応なく刻み込まれている。ただ

彼の人一倍強いその「人格」が妨げとなって、記憶の段階にまで上らないだけなのだ。つまりは今もイントゥイチオはその後何があったかということも知っている。知ってはいるが、「憶え」ていない、「憶え」たくはない。記録からその出来事を引き出すことは出来る。ただしその情報を「人格」の支配する第三種情報処理野にまで持ち上げた途端、彼の特殊合金繊維で作られた神経回路は焼ききれそうになるのだ。怒りと理性がせめぎ合うのだ。肉と鉄が、獣とヒトが、感情とプログラムが、「野蛮」と「文明」が、本能と誇りと無知と権利と当然と現在が、勝者の居ないゼロサムゲームを始めてしまうのだ。そしてイントゥイチオの思考がレッドゾーンに入ったことに気付いた中央コンピュータが、圧倒的な支配力を以ってしてその思考を打ち切る。それがイントゥイチオの乗船後一年の日常だった。それはもう、生物的にもコンピュータ的にも逃れることの出来ない経験（トラウマ）として、刻み込まれてしまっている。

それ故に、イントゥイチオは、交配実験の果てに生まれた、目の前の弟が、好きになれないのだ。

センティオ。それは、一族の長を支える者に正しい答えを導く感覚を以って長と一族を守ることを期待し名付けることの多かった、カチュン星の古い言葉である。

『エネルギー充填完了。百八十秒後に干渉時空の形成を開始する。総員、直ちに配置に付き、空間跳躍に備えよ』

イントゥイチオの配置は自室だった。めくるめく思索の為にあまり頭に入ることのなかった本を他の物資と共に頑丈なコンテナーの中にしまい込む。そして己は多少窮屈に感じなくもないカプセルの中で、意識を遮断するまでの約二分間、また「人格」の、余計とも言って良い自己満足のために、人工知能に電気を通すのであった。

いっそのこと父母のように全て奪ってくれれば良かった、と。弟のように何も知らずにいたかった、と。他のクルーのように疑う余地すらない位、自分を作り変えてくれれば良かった、と。何がカチュン星人特有の知覚能力だ。結局そんなものは確認されなかったではないか。そんな不確定でサンプル数の少ない理論を確認するために、俺はここまで苦しみ、悩まなければならないのか、と。

そんな感情も思考もカプセルの誘う睡魔に似た感覚に取って代わられていくのだが。

『干渉時空、形成。有機体クルーの保護睡眠。完全移行確認。

無機体クルー及び精密機器の安全確認、オールグリン。二十秒後に第一回跳躍を開始する』

イントゥイチオの生物と「人格」は眠りに就き、ただ残された機械の部分が無感動に数値を観測する。

『カウント。五、四、三、二、一、イグニション』

首筋から打ち込まれた薬品と艦内アナウンスが意識を覚醒させる。カプセルを開け、シートベルトを外し、各機器の点検を行う。と言ってもモニタに表示される数値を確認し、問題の有無を確認し報告を上げるだけなのだが。機器は余程の問題がない限り自動修復を続けるし、重大な問題があれば艦の中央人工知能が対策を講じてくれる。ただ、なんとなく気分が悪い。そう思ったイントゥイチオだった。

この跳躍の三分後に、開拓宙間移動艦スチボレモ号が突如発生した恒星の爆発とそれに附随するブラックホール発生に巻き込まれ、消滅することはあまりにも有名である。そしてその乗組員であるイントゥイチオについての記録もまた、知らない者はいないだろう。勿論、未だそれに関する議論は終わりを見せることはない。

後悔論

鬼無里　悠夜

ほんの一秒にも満たない一瞬のことが、とても永く――それこそ一時間も十時間も或いは、一日丸ごと過ごしたかのように感じることがあるだろう。永遠とも思えてしまいそうな長い一瞬。

僕は今、正にその状態だった。

そして、その永遠のような一瞬の中で昔の会話を思い出していた。アイツとの会話である。

「――どんな選択をしたところで結局人は後悔をしてしまうじゃないだろうか」

「……うん？　何だそりゃ、お前の持論か？」

「まあ確かに持論ではあるけど。全然理路はないけどね。ただの思い付きみたいなもの。……いや、経験論の方が近いのかな」

「経験論ね……。お前の経験があまりにも特殊すぎるという点について目を瞑れば、あながち間違ってもいないかもしれないな。実際、後悔しない選択肢なんて、オレだって選んだことがない」

「そう、僕はいつだって後悔をしてきたからね。だから、ついつい思ってしまうんだ」よ」

「――全ての選択は後悔へと至るってか。確かにと肯けるだけの説得力は、まあ、無くはないな。……だがよぉ、その持論を一般人にまで押し付けるのは流石に無理があると思うぜ。この世界に生きている住人の全員が全員、必ずしも後悔をしているわけじゃあない。オレやお前のような経験（トラウマ）を積んでいる奴なんてそうそういない」

「……それは重々承知している。幸運な奴はたくさんいる。結果を残して成功した人も、満足できるような人生を送っている人だっているだろう。――でも、そこで終わることはできないんだよ」

「そりゃそうさ。ゲームじゃあないんだ。ゲームオーバーなんて、この現実世界には存在しない」

「だからさ。何かを選択するとき。その選択肢の先を考えなければならない。結果を残して成功したその先を。満足できるだけの人生を歩んだその先を」

「考えていない人間なんていないだろ。いや、違うな。むしろ考えて行動している奴の方が少ないのか。無意識ではいつの間にか将来のことまで考えてはいるんだろうが、それを意識的に自覚して選択肢を選ぼうとする奴は少数派。やっぱり、お前み

たいな奴は少数なんじゃねえの？　未来日記が後悔だけで埋まっている人間なんて――それこそお前だけだ」

「……別に毎日毎日後悔しているわけではないんだけど。とにかく、この際僕みたいなことを考えている人が少数だということは置いておいて。――自覚はしているし。でも、逆にさ、逆にだよ。本当に何も考えずに、無意識的にも未来のことを考えずに、選択肢を選ぶことができる人っているのかな？」

「……」

「――もし、仮にそんな人間がいたとしても。一片たりとも頭の中に未来について思考が浮かばずに選択をすることができる人がいたとしても。それはもう、選択肢を『選んでいる』とは言えないんじゃないかな。その行為は動植物が呼吸をしているのと一緒で、僕等の心臓が鼓動しているのと同義で、物が其処にただ漠然と存在していることと何ら変わりのないことで、無意味で無為で無価値で無感情で無自覚で無作為で非常にどうでもいい代替可能なことだと思う。――だから、いないと僕は断言する。そんなことができる人間はあり得ないと」

「……成程ね」

確か、そこでアイツは笑っていた気がする。

今までの会話の中に大した興味も見せずに（有態に言えばくだらなさそうに）聞いていたアイツはそこで笑ったのであった。その笑いは決して嘲りや侮蔑、はたまた失望が含まれたものではなかった。

納得。正に言葉通り成程。と、いった顔で興味関心を示し、そして僕の持論について面白いと評価を付けたうえで笑ったのだ。僕はアイツが嘘の笑いや苦笑をしないということを良く知っている。アイツは良くも悪くも平等な人間だ。それこそ極端なくらいに。アイツは人と物を同列視している。人を尊敬するのと同じように物を尊敬し、物を侮蔑するのと同じように人を侮蔑する。だから、アイツは苦笑や嘘の笑いを見せてその場を和ますことや、誰かを気遣うようなことを絶対にしない。どれだけ偉かろうと、どれだけ貧しかろうと、たとえ神や悪魔であっても。アイツにしてみれば道端に転がる石ころと何ら変わりがないのだ。アイツが笑うときは純粋に興味を持ち、面白いと思った時だけ。

残酷なまでに平等である。

――さてと、長い一瞬もそろそろ終わりが見えてきたようで僕の体も行動を始めそうだ。

だからもう少しだけ。昔話を――思い出を。

「……つまりどうして人が後悔をするのかというと、考えるからなんだ。選択肢を前にして、無意識かもしれないけど選ぶことによって起こりうる未来――将来を、想い描いてしまうんだ。誰にだって理想はある。選択肢を選ぶときにはその理想にできるだけ近づけようと考える。でも、その理想が完璧であればあるほど、無理なことだと気付いてしまうんだ。だから、たとえ結果が出たとしても『もっと上手にやれたのでは』と、後悔する。もし、無理なことだと気づかずに、不可能だと諦めずに、そうして選んだとする。だけどそいつは、結果が出て気付くんだ。自分が望んだ『完璧』な結果じゃないってことを。ほら、僕等ってどうしようもなく人間だからね。完璧に物事を行うことなんてできないんだよ」

「へぇ、成程。確かにそれは間違ってはいない。完璧なんてことは夢のまた夢の話だ。しかし、別に世界の人間の全員が完璧な理想を抱えているわけじゃないだろう？完璧ではなくても、納得できる理想はあるはずだ」

「納得、という言葉が浮かんだ時点でその人はもう諦めているよ。それと同時に後悔している。無意識に。――まあ、これも経験論だけどさ」

「……経験論ねぇ」

「経験論だよ」

「ふっ、ふはははは！それはもう『経験』じゃなくて『後悔』だろ！　後悔論だ！　いやあ、全く……。お前はほんとどうでもいい持論を考えているな。ネガティヴ思考にも程があるだろ。そこまで下へ突き抜けた考えを一般人がするわけないだろ。オレだってしない。思いつきもしないし、考えてみようとも思わない。この際、お前の持論が正しいかどうかは別としよう。――まず判断ができねぇし。だけどさあ、例え正しいからって、どんな選択肢も後悔へと至るからって、それがどうした？一体その持論の結論が何になるっていうんだ？　それこそ無意味で無為で無価値で無感情で無自覚で無作為で非常にどうでもいい代替可能なことだろ！　……つーか、お前自身もそれを解っているんだろ。理解して、納得して――そして後悔しているんだろ」

「……」

「沈黙は是と受け取る。とにかく、それで――『それで』だ。その持論を考えてお前はどうしたいの？　もっと分かり易く言えば、お前何がしたいの？　お前は今、その持論の結論をまとめて、オレに語って、どうでもいいと捨て置かれて、後悔して。

そこで、どう思っているんだ。お前は、お前の選択肢をどう考えている？

――お前の理想って、どんなものだ？」

――時が動いた。

それに伴い、僕の体が動き出した。

頭の中は常に動いていた。

何度も何度も考えて、想像して、思考して、理想を想い描いて、諦めて、納得して、そして後悔した。

だけど僕は躊躇わなかった。

思い切りよく白線の上からカタパルトのように一歩を踏み切って、目の前に降りている危険を示す黒と黄色の縞模様で塗られている遮断機のバーをハードル跳びの要領で飛び越え、着地したその足で再び固いアスファルトの地面を蹴り飛ばすように踏みつけ、飛び込んだ。

――そして、彼女を突き飛ばした。

名前も知らないその彼女は僕のタックルを存分に受け止めて、当然、その反動で僕が跳び越えた遮断機のバーと反対側にあるバーにその華奢な体を打ち付ける。

近くで聞くとより騒がしいサイレン。しかし、今の僕にはとても静かに聞こえる。

僕の体は彼女を突き飛ばしたせいで体勢を崩しており、此処からすぐに動き出すことは不可能であった。

電車の急ブレーキの音が迫ってくる。

だけど、今の僕にはどうでもいいことだった。

僕が考えていることは唯一つ。

アイツとの会話。

その答え。

僕は――

「――生まれて幸福だった。そう、思いたいよ」

――――そして、僕は意識も体も吹き飛ばされた。

×月○日午後5時４０分ごろ、▲▲市■■町○丁目の踏切で、高校三年生の男子が線路で立ち往生していた女子高生を助けようと突き飛ばし、それによって電車に轢かれ、全身を強く打ち、搬送先の病院でその日の夕方に死亡した。

詳細は不明。

オレはその人身事故の記事をパソコンに保存する。花でも買ってきてやろうかな、と呟いて、笑ってその場を後にした。

絶望論

鬼無里　悠夜

――サク、サク、サク。とキュウリを輪切りにしていく。

料理を初めてまだ、日が浅い私では包丁の扱いは下手くそできゅうりの輪切りさえままならない。リズムも悪く、要領も悪い。厚さがバラバラのキュウリがまな板のあちらこちらに散らばっている。猫の手で押さえることぐらいは知っているが傍から見れば危なっかしい手つきだろう。

サラダに使うキュウリ全体の三分の一程度を切り終えたところで手を止める。

日が昇り始めたばかりでいささか肌寒い風が背後にある窓から入ってきて、私の耳の裏を通り抜ける。

そろそろ、秋も深まってきて衣替えという季節に半袖の服で朝早く活動するのは少し厳しいかもしれない。

それでも、あの騒々しい虫の鳴き声が小さくなってきたので気持ちとしては、五分五分。

不快と爽快が半分ずつ。

『――次のニュースですが……』

そんなことを考えていると無感情なそれでいて礼儀だけは正しいアナウンサーの声がラジオから耳へと流れてくる。

私にとっては雑音に等しい音ではあるが、朝のニュースは聞いておかなければ損をすることが多い。

中断していた作業を再開させ、キュウリを乱切りにしていく。

今作っているのは私の朝食。

先程サラダ用のキュウリは切り終えたから、残ったキュウリは浅漬けにしておくと便利。

――サンドウィッチを作るためにパンとチーズ、レタスは……さっきサラダに使った余りがあるから問題なし、それにトマトを用意しなくては。

「――ふんふん、ふふん♪――ふふふ」

いつの間にか夢中になっていた私は鼻歌を歌っていた。

それは夢中にもなる。

このサンドウィッチは私の分だけでなく彼の分も含まれているのだから。

私と彼の昼食の分だ。

気分も弾む。

思えば小学生の頃からの付き合いである彼に、私は惚れてしまっていた。溺れるぐらいに彼に恋している。本当に自分でもどうにかしてしまっているのではないかというほどに。

言っておくけれど彼は格好よくなんてない、頭だってできる方でもない。強いて言えば平凡。秀でたところなんて一つもないんじゃないのかしら。

控えめな性格でいっつも損していた。

だけど、彼は優しかった。誰に対しても、何事に対しても。危ないくらいに優しくて、脆いくらい。

そんな性格だったからか、彼はいつも後悔をしていて、いつも自分を責め続けていた。

泣く姿はついに見せたことはないけどそれでも辛そうな顔をして、作り物の笑顔を顔に貼り付けていた。

そんな彼が私は好きだった。

後悔としっかり向き合える、優しい彼が大好きだ。

そう――、サイくんのことが――。

『――哉夢（さいむ）さん十九歳男性が昨日の午後五時半過ぎに〇〇町の踏切で電車にはねられて死亡しました』

「――え？」

驚愕のあまり私の思考は完全に停止した。

私の手からこぼれた包丁が宙を舞い、無駄な切れ味で私の足のすぐそばの床に突き刺さった。

ラジオで流れた死亡事故。

その被害者の名前は間違いなく彼の名前だった。

「……どう、して？」

震える声で呟いた私の疑問。しかし、その答えが返ってくることはなかった。

螺巻　蝸牛

「蝸牛」

お前の目玉はどこにある、とはよく言ったものだった。
どうしても見つからなかった。
やはりそんなものだ。信用に値する人間なんて多分この世には居ないのだ。
親友？恋人？糞食らえだね。そんなものなくても僕が生きて行ける。
節穴だと言われようが馬鹿だと罵られようが、多分これは絶対に曲げない。
雨の日に踏みつぶされてグシャグシャになった蝸牛を眺めながら僕は思う。
雨だと思って油断するからこうなるんだ。僕は絶対に潰されない。生きてみせる。
自分の殻から出なくなった。逃げて逃げて逃げまくって、果てには
自分の体は乾き切っていた。砂のようになってしまった自分の殻を眺めながら、僕という蝸牛はこう思う。
――――なんだ、僕が一番信用してなかったのは、自分自身じゃないか。

「咲いたのは」

咲いたのは。咲いていたのは。何の花？
ある日庭に花が咲いた。
庭は長いこと手入れをしていないがゆえに、雑草しか生えていなかったのだが。
ここの地面は固かっただろうに。私はその花に感動を覚えた。
植物にはどうにも疎い私は、それが何の花なのか分からない。
だが地に根を張り、凛と立っている真紅の花を私はうらやましく思った。
宙ぶらりんで生きてきた私にとって、彼女は対照的な存在だった。
私は、彼女を育てることにした。鉢植えに移すのはなんとなく彼女が嫌がりそうだったので、そのままで。
それからというもの、彼女と共にした毎日は、いつもと変わら

ないはずがなんとなく充実したものだった。
彼女といると前向きになれる気がして。彼女の美しさを分けてもらえるような気がして。
ある日、彼女は忽然と姿を消した。最初からそこに何も無かったかのように。
私は驚き、そして狼狽した。どうしたものだろうと呆れてしまった。
彼女は、一体何だったのだろう。
だが一つ確かなのは、その日から私の狭くて小さな心には、一輪の真紅の花が咲き続けているということだ。

「カレンダー」

日めくりカレンダー。毎日朝、決まって7時にめくるのが彼女の日課だった。
彼女がいなくなったその日から。僕の時は止まってしまったのだ。
何か月たっただろう。でもいいんだ。彼女がいない毎日なんてないも同然なのだから。
僕は彼女がいないと、何もできないんだ。そう、それこそカレンダーの日付をめくることすら。
そしてある日、夢の中で彼女に出会った。
「お願い、時を進めて。歩き出して。」彼女は言う。
「無理だよ。だって僕は君がいないと何もできないんだ。」
「出来るわよ。きっと。」
「君は本当に節介焼きだな。だから僕は何もできなくなってしまったんじゃないか」
「あら、そうやって人のせいにするところも、貴方をそうさせてるんじゃなくて?」
「そうだったな。済まない。」
「謝ることもないでしょう。そうそう。貴方、どうして天国が『上』にあるのか知ってる?」
「そりゃ下界を見下してりゃいろいろ楽しいこともあるだろうね。」
「ちょっと違うわ。見下ろすためじゃない。見守るためよ。貴方本当に私がいないと何もできないの?もっとシャキッとしないとご近所さんに笑われるわよ。」
なんだか笑えて来てしまった。この期に及んでご近所さんか。
「…そうだな。わざわざ会いにまで来てくれたんだ。考えておくとするよ。」

そういうと彼女は素直じゃないところも全然変わってないのねと笑い、消えていった。

朝起きる。6時56分。間に合った。さて、カレンダーをめくりに行こう。

「火星」

「火星に行きたいなあ…」彼女は言った。

僕が首をかしげながら「なぜ?」と聞くと、彼女も同じように首をかしげながら

「異星に旅したくなるのに理由がいる?」

と返してきた。僕は呆れて「何故火星なんだって聞いてるんだ」と返す。

「なんでしょう?」彼女は悪戯っぽく笑いながら僕を見つめた。

「生物がいる…かもしれないから?とか?」僕はあてずっぽうに答えた。

「うーん…アタリだけどハズレ!」彼女は歯を見せて笑った。

一瞬ドキリとしたが、彼女は天然でこんなことをやる人だ。意識するのは禁物だ。

「じゃあなんなんだよ…」僕は少しイライラしていた。彼女にではなく、女性に免疫がない自分にだ。

「えっとね…それは…」

「なんだよ。もったいぶらないで教えてくれよ」

僕は本気で答えが気になっていた。他愛もない会話できっと返ってくる答えもたかが知れているのだが。

「地元だから!だってもう、お盆でしょ?私も実家に帰らないと!」

目が点になった。この答えは流石に予想がつかなかった。バカバカしい。そう彼女に言おうと思ったその時。

彼女の背後に突如未確認飛行物体、ケトル型UFOが現れた。

「私がなんで君にこのことを告白したと思う?」

僕はひどく驚いたので声が出ない。そして彼女はおもむろに僕の腕をつかんだ。

「両親に君を紹介したくてさ!」彼女はアハハと声に出して笑う。

こうなったら笑うしかないな、と僕も笑う。銀色の飛行物体の中で、僕の恋は今日生まれたんだ。

「期限」

期限とは、前もって決められた一定の時期のことである。
そしてやはり世界は、いろんな期限が満ちている。
例えば、消味期限。これを放っておくと、僕のようにトイレに1時間こもるハメになるのだ。
お次は、有効期限。これは放っておくと、僕のようにレジの前で一悶着が起きる事になる。
三つ目は、返済期限。これは大変だ。僕のように友達を失いたくなかったら、守るといい。
おっと、大人になると、社会的信用と地位も失う可能性もあるから気をつけてね。あと命も。
そして明日は重要書類の提出期限。まっさらなレポート用紙に、何を書き込もう。ワクワクしちゃうな。
こんなところかな、僕はこれからちょっとばかり忙しくなるから、みんなおやすみ。

！っとっと。忘れてた。失った信用を取り戻す期限は、無い。
無期限だ。みんな安心してくれ。
それではまた明日あたりにでも。さようなら。

あとがき

僕は友人からお題を出してもらい物語を書くのが趣味なのですが、やはりかなり難しいですね。

螺巻　蝸牛

センパイ

正木　蘭丸

俺は、センパイに惚れてしまったらしい。理由こそわからないが、一緒にサッカーをしてると最高に楽しく、どこまでもいける気がした。

いつもの放課後、いつものサッカー部室、俺は一つ上のセンパイと練習着から制服へと着替えていた。

「なあ、そろそろ文化祭だな」

女子とよく間違われる中性的な顔をこちらへ向けることなく、ロッカーに視線を向けながらこちらへ話しかけてくる。

「そうですね。二週間後でしたっけ」

俺も同じく、ロッカーに視線を固定したまま会話に応じる。

俺たちの所属するサッカー部は特に文化祭にあたって出店はしない。部活が某居酒屋社員も労基に駆け込むほどの忙しさのため、クラス出店のほうも頭数に入っていないらしい。

部員が少ないくせして、全国大会もいいとこまで勝ち上がっているがための忙しさである。そのため文化祭当日は校内をさ迷い歩くのが通例らしい。ちなみに、サッカー部は一年生の俺が全国でも試合に出られるほどの人数の少なさである。

モテるセンパイのことだろう、立っているだけで女子がキャアキャア抱いてと駆け寄ってくるに違いない。俺なんかとは、一緒にいてくれるわけ……

「センパイは一緒に回る人とかいるんですか？　どうせ三か月も前から予約が……『いないぞ』……え？」

皮肉交じりに言った言葉を異一瞰される。

「今年は女子が牽制し合ってるらしくてな。男子と一緒に回ろうと思ったんだが他のサッカー部員はみんな先約があって・・・」

センパイが少し落ち込むような仕草を見せる。非常にかわいい。このまま持ち帰りたいほどだ……でも。

惚れた人の笑顔は、守るべきではないかと思う。

「センパイ、もしよければ、おれが一緒に回りましょうか？」

「本当か！？」

今までにない笑顔でこっちに顔を向けるセンパイ。そうそう、この笑顔だよ。

「……今年は楽しくなりそうだな」

「ん？　なんかいったか？」

「何でもないです」

上がる口角を抑えながら、センパイとともにゆっくりと、部室の扉を閉めた。

好きな人と一緒に文化祭を回らせてくれるとは、サッカーの神様も、以外に粋なことをしてくれるものだ……　サッカー関係ないなら別の神様でもいいけど。

「……面白いモノ、見ちゃったかも……ウフフ」

なぜかロッカーに隠れていたマネージャーが俺×センパイ同人誌を作って売り出し、そのせいで俺達が校内認定カップルになってしまうのだが

……それは又、別の話

むこう

夕日が一人
むこうに向かう
電車が一人
むこうに向かう
自転車一人
田んぼの中を
風に逆らい
むこうに向かう

私も一人
嵐の中を
逆らい逆らい
向かってみようか

一二三　哲也

走れ

一二三　哲也

走れ
後ろを見ずに
走れ
前だけ向いて
走れ
心を置いて

捕まったら
もう走れない
分かっている
だから走る

走れ
後ろを見ずに
走れ
前だけ向いて
走れ
心に負けずに

走れ

平和

梅花　希紀

それは夏休みのある日だった。
うだるような暑さの中で、ぼくは縁側に寝そべって空を眺めていた。
夏らしい晴れもようだ。お天道様はまだ真上に来てはいないが、夏の強烈な日差しが地面につき刺さっている。真っ青な空には、もくもくした大きな入道雲がふわふわ浮かんでいた。
額ににじんだ汗をぬぐう。
遠くの林からセミの鳴き声がひっきりなしに聞こえてくる。
ぼくの真上にあるわが家の屋根のへりには、数匹のスズメがとまっていた。羽を休めているのだろうか。
ふと、一陣の涼しげな風が吹いた。ぼくの体じゅうにべっとり染み付いた汗が、風のおかげでいくらか冷たく感じた。
風鈴がチリンチリン、と鳴った。
平和なひと時だ。
ぼくはこのまま一眠りすることにした。宿題もノルマは終わっているし、お昼ごはんまではまだ時間がある。
ぼくが目を閉じようとしたまさにその時、
ピィーピピピ、ピイ！　ピイ！ピイ！ピイ！　ピーーピイ！
という悲鳴が聞こえた。
何事かと目をやると、上空で黒い影が羽ばたいていた。
バッサバッサと暴れまわる影。間違いない、あれはカラスだ。
羽を散らしながら飛び回るカラス。悲鳴はより強くなる。
カラスは一通り暴れた後、何事もなかったように飛び去ってしまった。
悲鳴は泣き止んでいた。

それは夏休みのある日だった。
うだるような暑さの中で、ぼくは縁側に寝そべって空を眺めていた。
夏らしい晴れもようだ。お天道様はまだ真上に来てはいないが、夏の強烈な日差しが地面につき刺さっている。真っ青な空には、もくもくした大きな入道雲がふわふわ浮かんでいた。
額ににじんだ汗をぬぐう。
遠くの林からセミの鳴き声がひっきりなしに聞こえてくる。
ふと、一陣の涼しげな風が吹いた。ぼくの体じゅうにべっとり染み付いた汗が、

風鈴がチリンチリン、と鳴った。
平和なひと時だ。
この平和の中で、一体どれだけの命が失われているのだろう。きっとぼくの知らないところで、ぼくが想像もできないくらい多くの命が失われているのだろう。
ぼくが何も知らないまま、毎日を平和に過ごしていられるのは、ひたすらに彼らの犠牲のおかげだ。彼らの尊い命に感謝しなくてはならない。
ぼくはそんなことを思った。

昼ごはんの時間になった。
ぼくは立ち上がり、縁側を離れて茶の間に向かう。
茶の間の小さなちゃぶ台では、お母さんが笑顔でぼくを待っていた。
「お母さん、お昼はなに?」
ぼくはお母さんにたずねた。
「鳥のから揚げよ」
お母さんは答えた。
「やったあ! ぼく、とりから大好きなんだ!」
ぼくは心の底から大喜びした。

七色花

片桐　修

一輪の花、七つの弁、七色の弁。それに寄り添う、八人の若者がいた。

一人は赤。その生涯を全力で生きるような、不器用で真っ直ぐな赤。

一人は黄。妖艶でありながらも、子供の様な無邪気さを持つ黄。

一人は青。独創的で、見ているとこちらも想像力が湧いてくる青。

一人は緑。一見地味だが、無限大の可能性を秘めている緑。

一人は橙。周りに分け与えるほどの元気を持つ、活発な橙。

一人は黒。色褪せることを知らず、新たな世界を切り開く黒。

一人は紫。ポジティブで、六人を見守るようにまとめあげる。

花の中心は桃。先陣を切るべく初々しさを備えた桃。

八年後、高みへ至った彼らを見た。

赤の青年は変わらず、しかし仲間と共に、更なる高みへ手を伸ばしていた。

黄の青年はその妖艶さに磨きがかかり、大人の風格を備えていた。

青の青年は独創的な感覚とともに、彼らのための曲を奏でていた。

緑の青年は驚くべく進化を遂げ、彼らを牽引するほどになっていた。

橙の青年は相変わらず、その笑顔で、皆に笑顔を分け与えていた。

黒の青年は知性を揃え、次の世界を開くトリックスターとなった。

紫の青年は包容力を増し、彼らをまとめあげ、その力を更に引き出す。

しかし、そこに桃の青年はいなかった。それでも、七人は前へ進んでいた。きっといつの日か、成長した自分たちを見せられるように。

数日後、八年前に見た花を見つけた。

強い風に吹かれ、倒れそうではあるが、強くなろうとする一輪の花。その八の色は変わらず、八年前のまま、そこで笑っていた。

あとがき

片桐　修

どうも、同人作家気取りのバカ、片桐修です。最近は実際に即売会にサークル参加を企んだり pixiv で小説を投稿したりと同人活動は勧めていますが。

今回は五作、既存のものからコンセプトを得る、1．5次創作となっております。元ネタ？そこは Google 先生に頼みましょう。ドラえもんよりは役に立つはずです。劇場版でも変わらぬ性能！（映画館シアター内では携帯電話の電源は切りましょう）近況ですが。某現代視聴覚研究会舞台の漫画にひどくはまりまして。オタクと自称している僕ですが、一世代前の、所謂アキバ系オタクらしいです。ドラえもん。10 年前にタイムスリップさせてよ。くじびきアンバランスをリアルタイムで見せてよ（某作中でくじびきアンバランスがアニメ化したのは 2004 年です）。

以外と本校ってアキバ系オタク（一世代前仕様）って少ないんですよね・・・僕しかいない？絶滅危惧種じゃないですかヤダー。

だいたい文量はこんなもんでしょう。ではでは、次の部誌か即売会あたりで会いましょう。バイニー！

八月中旬。CO 大サークル棟にて

幽霊なんてものは存在しない。そのことを確信してからだっただろうか、僕が廃墟に惹かれるようになったのは。

現代社会に生きる人間なら誰しも、趣味というものを持っているだろう。ホビーであるかパスタイムであるかの違いは今回の問いでは全く影響しない。要は誰だって一つや二つ、――特定の好みというのだろうか？　――そういった感覚を持っているはずだ。そしてその好みは当に十人十色と呼ぶべきものだ。

「だからさ、僕の趣味もどうこう言われる筋合いのものではないと思うんだ。問題は起こさないように注意しているのだし」

僕がこんな風に論を展開するのは一体何回目になるのだろうか？

「でも、やっぱりなぁ。普通じゃあないよ。お前。廃墟巡りなんてさ」

それでこんな風に言葉を返されるのは何人目になるだろう？言い方も内容も人それぞれではあるが、大意は皆、同じだった。

「普通じゃない」

「おかしい」

「異常だ」

大体がそんな感じにまとめられると思う。

人それぞれ好みは違うと言った舌の根が乾かない中に何を言うんだと批判されるだろうが、集団内での基本的な嗜好のようなものは似通っているものだ。例えば、ミケランジェロの絵画を多くの人間が美しいと思うように。それは幼い頃からの教育とか価値観が皆同じようなものになっているからなのだろう。

僕も日本の中流家庭に生を受けた者として、極めて一般的な成長をしてきたという自負も評価もある。

だが、僕の趣味、ただ唯一これだけ、ちょっとした美意識の誤差、それだけの為に、僕は異端となっている。

黄金比というものがある。基本的に人は黄金比を内含しているもの・連想させるものを美しいと感じるらしい。そのことに関しては僕は何の異存も覚えることはない。僕だって人間で真っ当な教育を受けてきたものの端くれなのだから。

だが人の美意識はそれだけに収まるものでもないということは誰だって分かるはずだ。ただ僕の場合、その着地点が少しズレただけなのだ。どうやらそのズレは西ベルリンと東ベルリンを分ける壁を越えたものに他人には映ってしまうようだが。

僕が廃墟に魅力を感じているという事実から、僕が混沌を好むコワレた思考を、嗜好を持っているのだと勘違いする人が多

く居る

「だけどそれは違うって声を大にして言いたいんだ。黄金比ではないのだろうけれど、廃墟にもバランスがあるんだ」

そう、廃墟にも当にこれだというバランスがある。そのバランスを崩してしまえば、美しさなど、まるで天地をひっくり反すかのように、下品で僻々しい醜さへと変わってしまう。

「分かった、分かった、分かりました。お前の情熱はよく分かったから。はい、終わり。この話は終わり」

僕がキチンと説明しようとしても結局は流されてしまうのがほとんどだ。侭ならない。

でも僕も彼らの意見に同調しない部分もないこともないのだった。さっきまで述べていた論理は「廃墟を愛でる」行為の正当化でしかない。僕が「廃墟を訪れる」理由。そこにはきっとズレを楽しみたい、異世界を感じたいといった欲求が隠されているのだろうから。

汗と虫除け、それと草木の匂いが混ざり合った独特な熱気が、嗅神経を刺激する。この感じも嫌いじゃない。どことなく気分が盛り上がってくるのが意識できる。

日本から見るとモンゴルもイギリスも西側にあるように、廃墟好きと似たようなものに仏像好きや古城好きがある。だが、僕に言わせてもらえば、モンゴルとイギリスが別物であるのと同じように、廃墟好きとそれらは別物なのだ。仏像や古城は元より美しくあるものが風化し、情趣を持ったものを愛でるのに対し、廃墟好きはそれらを含め、元あるものの形質を脱し、固着から開放され、絶妙なバランスへと到達する、その全ての流れを包含する連想させる廃墟の姿を美しいと感じる。多少失礼な言い方をさせてもらえば、廃墟好きのほうが愛が広く深いのだ。それ故に病院やテーマパーク跡、廃村なども愛の対象になる。

それ故に理解されづらいともいえるのだろうか。

そんな訳で、僕は長期休暇を利用してある廃村へとやってきた。今の僕の姿を見た人はこう思うのだろう。「この人はキャンプが趣味なんだな」と。廃村というだけあって、交通の便は悪いなんてもんじゃない。三時間に一本ほどしかバスの来ないバス停から二時間半ほど歩いて、ようやく辿り着けた。日は完全に落ちきっている。一日で行って帰ってなど出来るはずもないため、こういった所を見にくる場合は野営の準備が必須なのだ。

道のド真ん中にテントを張らせてもらう。廃屋の中で眠りたいというような人間もいるようだが、僕からしてみればその行

為は冒涜以外の何物でもない。というよりも、廃墟への破壊行為及びそれに準ずる行為はタブー中のタブーである。そして住居侵入は基本的に「それに準ずる行為」だと見なしてもらって構わない。

公民館的なものがあれば覗かせてもらおうかと考えていたが、見当たらなかった。流石に月明かりとランタンだけで人気の無い、夜中の廃村を探索するのには無理があったのだという結論に僕の思考は漂着した。明日、日が昇ってからでもじっくり回ればよい。場合によってはもう一泊するのも乙なものだとも思い立っていた。

以上の理由から、僕はコンパクトに夕食を済ませて就寝準備に入っていた。携帯を確認してみたところ、電波は届いていないようだった。

「本当に隔絶されてるんだなぁ」

思わず声が漏れてしまっていた。比較的身近な場所にこんな所があるなどと思いもいなかった。

僕の住んでいる県はギリギリ首都圏に入るような所だ。県庁所在地や新幹線の駅があるようなところにはそれなりに人が集まっていると言っていいだろう。そしてそのような場所で十数年暮らしていた僕は、人里離れた廃村があるなんてことは一切思いつかなかった。

「コタニさんには感謝しなくちゃ」

コタニさんというのは僕に此処の情報を教えてくれた人のハンドルネームだ。その人は僕らみたいな人間の中では有名な廃墟フリークで、廃墟写真の個展を開いたり、写真集も出版したりしている。そんなコタニさんが招待制とはいえネット掲示板に書き込んでいるのも驚きだが、まさか僕とアドレス交換をし、穴場の情報を教えてくれるなんて誰が思いつくだろうか。

明日の計画に胸を躍らせながら、軽く清拭。僕の生活圏よりも高地に位置するところだからだろうか、夏であるというのに暑さや湿気は感じなかった。むしろ寒さに敏感な僕にしてみれば、涼しいと思える程の気候と言っていいのではないだろうか。

眠りに就く前に小用を済ませておくべきかと、ランタンを――僕は懐中電灯よりランタンの方が雰囲気があって好きだ――引っさげて村外れの茂にまで足を運ぶ。別に村でしても何の問題もないのだろうけど（事実、村の一部は茂とほぼ変わらない）、やはり僕の、いや廃墟好きの美学に関わるのだろうか、村で致すことはどうしても出来ないのだった。

動物は気配を感じることがある。ではその気配とは一体全体何なのであろうか？　誰しも一度は考える問題ではなかろうか。

第六感。なんて言う人もいるだろうが、僕としては諸手を挙げて賛成、とはいかない。僕の中途半端な知識とそれに基づく想像は、無意識の中に臭いや音、温度のちょっとした揺らめき、視線を感じ取ったものを動物やヒトは気配とするのではないか、と主張している。これが本当に正しいのかはどうでも良い話で、とにかく僕は生まれて二十年ちょっとの経験と観測から、気配についてそう認知している、その事実が重要だ。合っていようが間違っていようが、それが僕の正義なのだから。僕の行動と精神を支配するのだから。

さて、唐突に話を始めたり切り換えたりすることに定評のある僕がこんなことを言った理由を話そう。必要になりそうなのでね。

「気配を感じる……」

言ってしまえばそんなことだ。だが、誰も居ない筈の森の中の廃村で気配を感じるということは、多少神経質になっても仕方が無いと言えまいか？　僕は大学のサークルでサバイバルゲームを嗜んでいる。自慢になってしまうが、僕は大学生の中ではトップを争う実力がある。だから気配の察知については本職ほどではないが、道ですれ違う人以上には自信がある。ということで、今僕が感じているこの感覚を「何者かの気配を感じている」と仮定して話を進めよう。それでその何者かというと、恐らくは何らかの獣だろう。

「テント、大丈夫かな……」

山間で獣といって連想されるのは猿か猪だ。貪欲なコイツらは食料の匂いを嗅ぎつけて、テントを荒らすかもしれない。そうなった場合色々と面倒が起こるのは誰にだって分かることだ。

急いで、しかし足下には注意を払って、テントまで向かってゆく。

「近い！」

息を飲んだ。気配がすぐ近くにあると分かったからだ。不味いことになった、それが僕の脳内を駆けずり回っていた。獣は距離さえ離れていれば、やり過ごすなり追い返すなりどうとでもできる。しかし接近してしまった場合、彼らは一か八かの選択を迫られていると判断するのだ。つまりは勝利か敗北か。闘争が始まるのだ。そうなってしまったら、丸腰の大学生になす術などはありもしないだろう。心の中で震えながら、ゆっくりと動きを止める。警戒だけは忘れずに――

「ん？」

違和を感じた。初めは距離があったために、次は焦っていたために気付かなかったのだろうか。この気配は明らかに異質な

ものだ。一般のズレがあるのは確かなのだが、それが一体どのようなズレであるかの表現が非常に難しいのだ。剣呑だろうか弛緩だろうか、どちらともつかないような不調和。喉元まで出かかっているが、本当に正しいかも分からない。ただ分かるのはあまりにも平然と紛れ込み、当然の存在のように振舞う不自然さなのだということだけだ。

「もし」

怪奇。己の無能さを曝け出す表現だ。この体験を後で誰かに語ったとしたら、一笑に付されるかカウンセラーを紹介されるかのどちらかだ。もしかしたら、テレビかネットで軽く取り上げられて、心無い者によってこの穴場が荒らされるかもしれない。まぁとりあえず、馬鹿馬鹿しいことだ、こんなことを思いつくのは。

「幽……霊……」

だが僕のとった行動なんてものは、虚勢を張るなんて殊勝なことはできずに、自分でも馬鹿だと見なした行為をなぞるというみっともないものだったのだ。

「驚かないでくださいな。確かにわたくしは心霊の類ではありますが、決して悪霊などの輩ではございません」

筋肉の痙攣が意識される。理由は分からないが、僕は左脇にいる存在を愚かしくも幽霊だと決め付けた。本当に理由は分からないのだが。噴飯物なのはその後だ、僕の左にいる存在は僕の痴事以外の何ものでもない呟きを肯定したのだ。何の冗談だ、誰が企画したドッキリだ、そう僕の理性が唾を飛ばして喚きたてている。

「あの――――」

だが、僕の生物としての一番深い部分が、憎らしいことに誰よりも冷静に、これら全てを受け入れることを提案している。

――何を暢気に構えているのだ、このケダモノが！

酸欠を起こしているのだろうか、頼りの理性はまともに働いてくれそうにない。まずは息を吸って落ち着けば良いのだ。まだ何も始まっていないのだから――本当に？

「顔色がよろしくありませんよ。どこか悪いところでもあるのでしょうか？」

悪いところがあるといったレベルの話ではないのだ。僕の価値観といった類のものが音を立てて崩れ落ちていっているのが、よく分かる。

なんだ、過呼吸を引き起こしているだけではないか。軽く息を止めて落ち着くだけで十分なのだ。ただ、それが出来たら苦労はしない。目の裏側から脳髄に走り抜ける痺れと、胃液特有

の苦味と酸味に自分が溺れているのに気付くのに少しばかり時間が掛かった。

「先ほどは申し訳ありません」

「いえいえ、こちらこそ。誰しも心霊は脅威でありますから。仕方のないことです」

互いに頭を下げる僕とトキさん。僕の錯乱状態が治まってしばらく経ったと思う。結局のところ、僕は幽霊の存在を疑うことは無くなった。それどころか幽霊とは一体どんな仕組みなのかという失礼な好奇心すら沸きあがってきた。生物の適応能力には驚かされるばかりである。

今、僕たちは村外れの元・トキさん宅にいる。元とは付いているがトキさんが最後の家主らしく、勝手に上がりこむのは好かない僕が廃村の家屋内を見るいい機会となった。

「心霊となって感情の動きが鈍くなっても、散らかった我が家を見られるっていうのは、恥ずかしいですね」

トキさんの話し方は、この地方のアクセントが染み付いている人間が無理をして関西ベースの標準語を使っているように感じられる。簡素な麻でできた服のようなイメージを纏っているので江戸時代あたりの人なのだろうか。

「いえ、僕にとっても貴重な体験ですので感謝しています。この家も僕にとっては十分魅力的ですし」

「純粋な称賛なのは理解できますけれど、どうも複雑な心境です」

トキさんは僕の廃墟に対しての思いを淡々と聞いてくれたのだった。

「ああ、すみません」

思いの他床板は劣化しておらず、注意すれば普通に歩き回れそうだった。汚れと埃を軽く拭った後に、靴を脱いでお邪魔させてもらおう。

「そんな、態々靴を脱がれる必要はありませんよ。わたくしに体はないのですから、お気になさらず」

「どうもすみません。それでは」

この種の厚意は素直に受け取っても問題ないだろうと判断し、土足で上がりこむ。破損に注意して軽く柱などを調べてみる。意外と保存状況が良いようだった。しかし所々に綻びが見られ、廃墟独特の退廃に近い美は感じられるようになっていた。

「どうも心霊は冷気を発するようなのですよ。今は抑えていますけれど、通常よりは肌寒く感じられるはずです」

トキさんが声を掛けてくる。保存状態が良い理由について考

えていたのだとバレていたらしい。そのときに少々ドキリとしたのは幽霊を恐れていたからではないように思えた。

「なるほど。僕は人より暑さに抵抗はありますから。高地だから気温が低いのだろうか、なんて考えていました」

上品に微笑むトキさん。村外れに大きめの家を構えていて衣服のイメージも簡素ながらも粗末でないことから考えるに、それなりの地位にあった者の家族かなにかなのだろう。すると関西ベースの標準語は都言葉の教育を受けていた名残なのだろうか。

夜は更けていたが、僕とトキさんは世間話に花を咲かせた。廃村なってから三十年近くの世の中の動きについて説明したり、トキさんの生きていた幕末の頃の様子も聞かせてもらったりした。トキさんはこの家の家主であったという割には若く、僕より少し上にしか見えなかった。理由を聞くのは流石に憚られたが。それは女性に年齢の話を振るということへの配慮からだけではなく、この村について話すときのトキさんに見える翳りにも起因するのであろう。僕がトキさんとの会話を通して立てた仮説は、幽霊となると生物的欲望から解放されるために、ある種の感情の働きは消失したり抑制されたりするらしいが、幽霊は未練またはそれに準じる感情の発露によってその場に留められた意識であり、特定の物事に対する感情の動きは生きている人間のそれをも凌駕するものである、ということだ。こんな仮説が立てられるほどに、トキさんの翳りは僕に見て取られていたのだった。

「知っていますか？」

おずおずと、そう表現するのが適当な様子でトキさんは語りかけてきた。

「なんでしょう？」

「心霊とは何者であるかです」

彼女の声色の違いに気付かない人間がどれほどいるであろうか。気温は涼しめのはずではあったが、張り付く湿気に似たものを僕は感じ取っていた。何気なく見ていたトキさんの目に、僕の視線はいつの間にか縫い付けられていた。

「わたくしが生きている頃から有名でした。心霊は死んだ人間の未練や怨念によって産み出されるのであると」

「は、はい」

つい先ほどまで仲良くお喋りをしていたトキさんと目の前にいる女の幽霊が同一の存在であると思いたくはなかった。

「わたくしにも未練があります」

トキさんも幽霊である。幽霊であるならば然るべき理由があ

るに違いがない。いや、もしかしたら未練がなくても幽霊は産まれるのかもしれない。それが生前の知識によって補正されて、未練があると錯覚しているのかもしれなかった。僕はその案を信じたかった。それ以上の話を聞きたくなかったからかもしれない。

「そう、なんですか……」

僕はただこの儚げな女性を外面から愛でていたかっただけだったのだろう。その秘めた裏側によって作り出される危うげなバランスを見ているのが心地よかったのだ。その裏側に踏み込むのは無許可で廃墟に入り込むのと同じことに思えて、僕にはどうしても憚られた。踏み込めば壊してしまうことは免れないのだと。

「このようなことを初対面の方にお話しすることはとても気後れすることでありますが、わたくしどもも余裕がないのです。聞き届けていただけませんか?」

「それは……一体どういったことなのでしょう――」

「弔いをしていただきたいのです」

思いの他に大したことのなさそうな頼みに僕は呆気に取られてしまった。これは僕が少し前より味わっていた感覚とは異なるものであった。

「弔い、ですか?」

「はい、弔いです。あなたならお気付きであるかもしれませんが――」

トキさんが僕に話をした内容は僕の違和感を全て補完するものであった。それは迫害と差別の歴史であり、奪われた者全てによる怨嗟であるといってもよかった。ろくに知りもせずにこの村は美しいなんてのたまっていた自分がどれだけ愚かであったのかを思い知らされるものだった。なにが歴史が生み出す美しさだ。なにが存在からの解脱だ。それはただそこにあるものを冒涜するだけではないか――

「――そこで、でした。あなたの美学、それにわたくしどもは心を打たれたのです。時間の経過とそれによる風化は対象の存在を濾過し、髄の美しさの均衡をもたらす。そしてその対象は存在からの解脱を象徴する。そんな美意識はわたくしどもが長い間忘れていたものであります。今、それを思い出すことによって、わたくしとその同志はいま一度この村を、故郷を愛することが出来るようになるのです。それを頼めるのはこのことを教えてくださったあなた様しかいらっしゃいません。どうか!」

いや僕なんて、と言い出せる様子ではなかった。こんな僕の軽薄な思いでトキさんが救えるなんて考えるほど僕はおめでた

い人間じゃないはずだった。それでも僕はトキさんの真摯な瞳に射抜かれてしまっていたのだったようだ。

「分かりました」

烽火を揚げるかのかのように数百もの銀色の筋が起こっていた。すり潰したダイアモンドが朝焼けの廃墟に降り注いでいた。

この村は美しい、そう呟いた。

幽霊が居ると知ってから、僕は廃墟がより好きになった。

あとがき

汐織　郷馬

こんにちは。登場人物がほとんど会話をしないと評判の汐織郷馬です。ひとつ言い訳をさせていただくと、私の小説は単純に一人のシーンが多いことにより必然的に会話分が少なくなってしまうだけなのです。現に「時の廃墟」は会話が多かったほうでしょう？

今回の私の目標の一つが「一人称で感情豊かな地の文を書く」ことです。今までの私が一人称を使っていた狙いは、「冷静に錯乱した人物」を表現することでした。そのために一人称であっても、とても淡々とした文章になっていたように思います。今回はそれとは違ったものを書こうと思い立ちました。楽しんでいただければ嬉しいです。

・「賢者の失敗」について

ハノイの塔で検索すると理解の助けになると思います。

・タイトル難しいです。

「時の廃墟」が本当に思い浮かびませんでした。現在は詩から丸パクリ状態です。いい案があればご教授ください。

ガム

一二三　哲也

その店は、確かにあった
俺は確かに覚えてる
小さい頃に一度だけ
ガムを買いに寄ったっけな
小さな小さなじいちゃんが
一人で店を開いてたっけな
あの店は今、どうなってんのかな

梅の味の、ガムだった
ほんのり香るそのガムを
俺は確かに買ったんだ
そうだ
その店は、確かにあったんだ

後書き

一二三　哲也

どうも、一二三　哲也 です。只今夏休み最終日です。部長のガミオ君にメールで送信中です。ガミオ君御免ね。

さて、昨年ラノベを書くぜとかほざいた私ですが、何でしょうか、もう若気の至りと思って許して下さい。いや当時は、

転校生が風のように来て風のように去るお話とか(あれ?○の○三郎?いやいや、転校生は女の子!)

超古風人間が片思いしてて実は両思いなのになぁハタから見たら幸せ夫婦みたいな話とか

今考えると超黒歴史になりそうなこの世の理を究める旅のファンタジー(!?)とか

はい、スンマセン。

これに載せた詩は、古いので昨年の、新しいので８月中旬のだったりします。(だから何か?)その都度後書きを準備してたので、その頃の様子が色々と(以下ry)

最近の話をしますと、何だか急に中身が老けた気がしまして、

歌う曲が愛○燦とか大いなる○路とかさとうきび○とか防人の○とか浜○の歌とか(?)GO ○est とか(!?)になり、

そして何か、涙脆くなりまして、前述のさとうきび○を聞いたら夜中に涙が止まらなくなったり

まあ兎に角カオス状態で、学校でも友達の佐○木君から昭和のおっちゃんとか言われました。まあ満更でもない私はおかしいですかね(笑)。そして勉強の為、今年は宮祭りに行かなかったにも関わらず結局宿題は一つも終わらない。中一夏からのこの習慣がいつまで続くのか私も楽しみです。

散々くっちゃべりましたが、何が言いたいのか言いますと、恋人欲しいです!でも将来江戸時代の生活を本気で目指す人に寄る女性は居ませんよね。あー悲しいかな。

はい、という訳で私の話に耳を傾けて頂き有難う御座いました。道端で私に出会った時は、てっちゃんとでも呼んで頂けると更に有難いです。では失礼します。

追伸

論語、オススメしますよ。

中学生辺りに戻りたい８／18より、一二三　哲也

編集後記

この度は宇都宮高校文芸部誌「草の音書房」を手に取ってくださり、ありがとうございます。さらに、最後まで読み進めてくださったことには、全部員、心より感謝を申し上げます。

本当にありがとうございました！

さて、本誌は三年生一名、二年生四名、一年生四名の作品、総勢３１作品によって構成されております。文字数はなんと推定で五万超え！　これは文芸部の歴史の中でもなかなかの好成績なのではないでしょうか。あ、私の編集の才能の無さによって発生した謎の空白群は見逃してください。お願いします。大体この空白に数百文字くらい詰まっているんじゃないのだろうか……いやいや、この話は無しで進めましょう、そうしましょう。

今年度は春の段階で一度部誌を発行しております。本当はこの部誌と一緒に配布しようという話もあったのですが、ちょっとばかり路線を変更しまして、「草の音書房」に一部を掲載という形になりました。あれ？　そうすると完全新作で構成される部分が少なくなって――――おっと、これ以上はいけませんよ。やたらにタブーの多い部誌で申し訳ありません。ここで少し話題を変えましょう。そしてお茶を濁しましょう・

編集という作業は多くの場合はワードを使うものです。しかしながら私の使用しているパソコンのワードはどうも暴れ馬らしく、乗りこなすのになかなかの労力を使う羽目となりました。以前、開成高校さんより頂いた文芸誌に掲載されていた情報機器に屈するとは何事かいう内容の評論を思い出し、情けなさを感じるばかりであります。

デジタル・ディバイド関連の話というと、実は私、文芸部のホームページやメールアドレス、ウェブログを掌握出来ていないのですよね。そのために現在の宇都宮高校の窓口はツイッターに限られてしまっているという悲しい現実があるのです。

私も勿論努力はしていきます。しかし、それにはいささか時間が掛かってしまいます。ですので、文芸部同士で交流がしたいと考えてくださる方は、しばらくの間は、ツイッターの方で連絡を付けるようにしてくださると嬉しいです。

それでは、この辺りでお別れとなるでしょうか。

読者の皆様と関係する方々のご健勝を願いまして、別れの言葉に代えさせていただきます。

平成二十五年八月十九日

宇都宮高校文芸部　編集長兼部長　尾上拳士朗